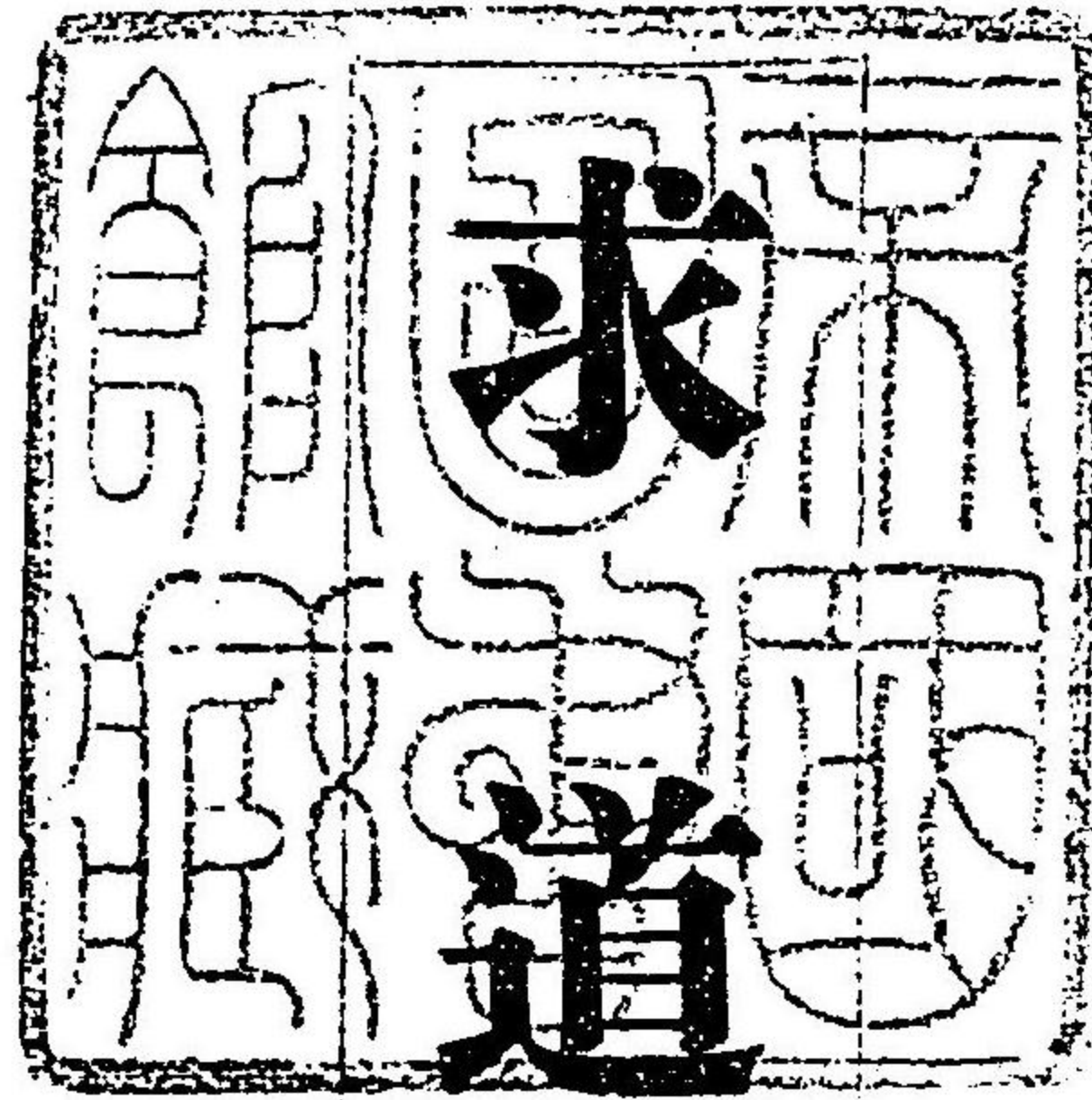


求道錄

曉烏敏著



特 18
466



錄

曉
烏
敏
著



求道録序

一切往生人等に白まさく、今更に行者の爲に一の譬喩を説きて、信心を守護して、以て外邪異見の難を防かむ。何者か是や。

譬へは人有りて西に向ひて行かんとするに百千の里ならむ。忽然として中路に二の河あり、一には是火の河南にあり、二には是水の河北にあり。二河各闊ひら百步、各深くして底なし、南北に邊はらなし。正しく水火の中間に、一の白道あり、闊さ四五寸ばかり

なるべし。此の道東岸より、西岸に至るに、亦長さ百歩。其の水の浪、交々過ぎて道^{ミチ}を濕^{シメ}す。其火燄亦來りて道^{ミチ}を燒く、水火相交りて、常にして休息することなけむ。

此の人、既に空曠の迥なる處に至るに、更に人物なし。多く群賊惡獸ありて、此の人の單獨なるを見て、競ひ來りて、此の人を煞さんとす。死を怖れて、直ちに走りて、西に向ふに、忽然として、此の大河を見る。即ち自ら念言すらく、此の河南北に邊畔を見ず、

中間に一の白道を見る、極めて是狹少なり。二の岸相去ること近しと雖、何に由てか行くべき。今日定めて死せんこと疑はず。正しく到り廻らんとするに、群賊惡獸漸々に來り逼む。正しく南北に避け走らんと欲すれば、惡獸毒蟲競ひ來りて我に向ふ。正しく西に向ひて、道を尋ねて去らんと欲すれば、復恐らくは、此の水火の二河に隨せんことを。時に當りて惶怖すること、復云ふべからず。即ち自ら思念すらく、我今廻へるも亦死せむ、住まるも亦死せむ、

去くも亦死せむ、一種として死を免かれざれば、我
寧此の道を尋ねて前に向ひて去かむ。既に此道あり
必らず度すべしと。

此の念を作す時、東の岸に忽ち人の勸むる聲を
聞く、仁者但決定して、此の道を尋ねて行け、必ず死
の難なからん、住まらば即ち死せんと。

又西岸上に人ありて喚んで言く、汝一心正念に
して直に來れ、我能く汝を護らむ。すべて水火の難
に墮せんことを畏れざれと。

此の人既に、此に遣し、彼處に喚ばふを聞きて、自
正しく身心に當りて、決定して道を尋ねて、直ちに
進んで、疑怯退心を生せず。

或は行くこと、一分二分するに、東岸の群賊等喚
んて言く、仁者廻り來れ、此の道嶮悪なり、過ぐるこ
とを得じ、必らず死せんこと疑はず、我等すべて惡
心ありて、相向ふことなしと。此の人喚ぶ聲を聞く
と雖、亦回顧す。一心に直ちに進んで、道を念じて行
くに須臾に即ち西岸に到りて、永く諸難を離れ、善

友相見て慶樂きやうらくすること已むことなからんが如し。

『求道録』の輯成り序を草せんとして直ちに唐の善導大師が「散善義」に於て示されたる本願の道を思ふ。仍て序に代へて、其の文を録す。諸兄姉願はくは、この譬喩を心の奥秘に深く蓄へ、以てわが『求道録』を味ひたまへ。

巢鴨の浩々洞にて

明治四十年三月二十八日

佛子 敏 識 す

例言

圓融無礙えんじゆむがいといふ事は私の理想である。この理想は私か求めた道にして今現に歩みつゝあるのである。

私は性來多角的の者であつたが、この理想を以て道を求めて行く内に、種々の境遇に接する毎に、だん／＼角かどがとれて行くやうに思ふ。

本書に載録した文字は、何れも皆自分が實際の場合に臨んで、迷まよひ、惑まどふた、末に發見し得た道を記載した文である。故に今回本書を編輯して世に公

にずる所以は、一つは自分の過去の修養の思出の爲、一つは自分と同じ道に進む人の参考の爲と思ふたからである。

本書は著者の信仰の方面を記した書ではない。故に本書に道といふは信の大道其儘にあらずして、この信の大道か、世の總ての事情に現はるゝ跡を求めたつもりである。故に本書をよんで信の道にあこがるゝ人は、「精神主義」、「續精神主義」、「精神講話」、「佛教講話」、「救濟觀」、「修道講話」、「死の問題」等の書物を繙きて頂きたいと思ふ。

求道録目次

- 一。 人生の苦味……………(一)
- 二。 落第……………(一〇)
- 三。 人の我が頭を搏つ時に……………(二一)
- 四。 男らしき服従……………(三九)
- 五。 一念の満足は永遠の満足也……………(七〇)
- 六。 如來の大命……………(七八)
- 七。 斷乎としたる生活……………(八九)

- 八。彼の物は彼に、我の物は我に……(九七)
- 九。同情を求むるは煩悶の元也……(一一〇)
- 一〇。他の罪を數ふるは自の罪を減する道にあらず……(一二七)
- 一一。馬鹿にせられたりとして怒る者は馬鹿也……(一二五)
- 一二。勝敗……(一二三)
- 一三。人の自分の同情を受けざるを煩ふ勿れ……(一三九)

- 一四。世の中の事は一條繩では引けぬもの也……(一四六)
- 一五。死及死の觀念か宗教及道德に及ぼす影響……(一五五)

己上

無明煩惱しげくして、
塵沙のごとく遍満す、
愛憎違順することは、
高峯岳山にことならず。

【和讃】

求道録

曉 烏 敏

一。 人生の苦味

一 藪の臺は苦いからと云ふてむげに捨てるないかに料理すればうまく味はへるであらうかと云ふ事を考へよ。(一)

一 人生にはいつも順境はかりある事は到底望めない事で時は逆境の來るのは豫め覺悟をして置かなければならぬ。(三)

一 長い月日の間には面白い事もあらう、辛い事もあらう、可笑しい事もあらう、嬉しい事もあらう、悲しい事も、苦しい事もあらう、面

人生の苦味

白い事だからといふて、一生涯續くものでもない、辛い事だからといふて、一生涯續くものではない、雨降りがあれば、天氣がある、冬があれば春がある、これ世の常である。(三)

一、一年中雨が降るでもなければ、冬が続くでもない、之と同じく一年中天氣がよいでもなければ、春が続くでもない、我等は此の間の呼吸を深く味ははねばならぬ、此の間の呼吸を深く味ふたならば、世を過す上に於て尠からざる教訓を得るのである。(四)

一、天氣のよいには晴々として氣持ちがよいといふ趣味がある、雨天にはしつとりとして落付くといふ趣味がある、冬にはしつかりとして厳格な趣味がある、春にはゆつたりとして溫和な趣味がある、之を反對の方から云ふと、晴天と春とは浮々して厭な所

がある、雨天と冬には陰氣臭くて厭な所がある、私はこの厭な方面に心を苦しめないで、趣味の方面を味ふて行きたいと思ふ。(五)

一、小供の頃には菓子あまの甘味や、果物の酸味は喜んで味ふ事をするが、落の臺の苦味や、唐辛の辛味を味ふ事ができぬ、刺身さしみや薬物の味を知つて、海鼠うしこや海鼠腹うしこばらの味を知らぬ人は未だ料理通とは云へぬ、口の進んだ人であるならば、菓子は菓子として其味を知り、果物は果物として其味を知り、落の臺は落の臺、唐辛は唐辛で其味を知り、刺身や薬物の味を知ると同時に、海鼠や海鼠腹の味をも知るであらう、尙ほ進んで云へば、能く味覺の進んだ人は濃厚な料理よりは反つて落の臺の味噌ある位を喜ぶのである、人生に處するに當つても之と同じである、修養の足りない人は順境の砂糖だけに趣

味を感ずる事を得るか、逆境の苦味辛味に至りては味ふ事が出来ぬ。夫て凡人はいつも順境ばかりであることを望んで居る。(六)

一、順境は春と同じく人を怠惰にするもの、晴天と同じく人を浮々とせしむる性質のもの故、人が若し順境ばかりて生活して行つたならば、のろ／＼した、浮薄な人間と成り終るであらう。夫てあるから逆境と云ふものが顯はれて来て、この人に勉強心を興へ、落付きを教うるのである。逆境には苦味のやうな辛味のやうな、しまりかあり、人心を刺激してひり／＼せしむるの力がある。之は我等か一人前の人と成るには缺くべからざるものである。(七)

一、晴れた夜の月もよいが、雲に隠れた月にも趣味がある。叶ふ戀もよいが、叶はぬ戀にも趣味がある。夫婦同居すると云ふに温和な

る家庭的の趣味があるが、互に忍んで別居して居ると云ふにも曲折した面白い趣味がある。幼にして親に別ると云ふはあまり甘い味ではないが、この苦味も修養の料理の仕方て非常な珍味となるのである。貧乏と云ふは人生の辛味ではあるが、この辛味も時には沈滞し怠慢になり行く腸胃を刺激して消化力を活潑ならしむるには大なる力がある。吉田の兼好か、花は盛り、月は隈なきをのみ見るものか、はといふたのはこゝの味ひである。親鸞聖人か流罪に逢ひなから、これなほ師教の恩致也と喜はれたのもこゝの味はひである。(八)

一、人か賞讃してくれる砂糖のやうな言葉もよいか、之ばかりでは何だかたよりのないこたゑがないやうな氣持ちがする。そこへ

攻撃誹難の聲でも聞くと、何だか身体が凜とするやうで、勇氣も出れば落付きも出て来る。賞讃者ばかりでは、決して日蓮も出来なかつたであらう、ソクラテスも出来なかつたであらう、六年の苦行がなくては釋尊の成道もなかつたであらう、磔刑もなかつたならキリストの感化は今日のやうではなかつたらう。婦人がかわゆい子がほしいと思ふならば、妊娠の苦痛を忍ばねはならぬ。(九)

一、人生に於ける苦味辛味と云ふものは、我等の精神を健全に鍛ひあげるには缺くべからざるものである。又能く味ふて見ると、この苦味辛味には甘味や酸味の及ばぬよい味のある事かわかる。齒の丈夫な人はあまり柔かな食のみでは満足しない。彼は時に齒ごたえのするものを好むてはないか、精神がしつかりして居ると、い

ろくの困難や辛苦と戦ふのも中々興ある業である。故に我等は逆境夫自身を悲むよりも、逆境に處して恐れず悲まない精神を鍛錬するやうに修養せねばならぬ。(一〇)

一、私は春の夢のやうな野邊を蝶の後を追ふて散歩するのも面白いと思ふが、之と同時に冬の吹雪の山路を息も絶えくに歩くと云ふ事にも面白味を感じるが、どちらかと云ふと、春の野の散歩の方は怠け易く、冬の山路の歩行の方が奮發するに便宜である。寒い日には風邪を引かずして、暖い日に風邪を引くといふのは、我々精神修養に關する好教訓である。(一一)

一、私は富貴よりも貧賤に多くの力を得るのである。賞讃よりも非難に多くの力を得るのである。相見ての嬉しさよりも、別れての

辛○さ○の○方○に○よ○り○多○く○の○力○を○得○る○の○で○あ○る○夫○で○あ○る○か○ら○し○て○私○に○
 は○人○生○の○艱○難○も○辛○苦○も○こ○よ○な○き○助○手○で○あ○る○而○し○て○私○は○常○に○思○ふ○
 私○の○や○う○な○怠○惰○に○陥○り○易○い○性○分○の○者○は○春○の○や○う○な○順○境○は○か○り○て○
 は○終○に○精○神○的○死○に○至○る○や○も○知○れ○な○い○晴○天○の○や○う○な○舞○臺○の○み○開○け○
 て○居○つ○た○な○ら○ば○浮○薄○極○ま○る○者○と○な○り○終○る○か○も○知○れ○な○い○故○に○私○は○
 折○々○冬○の○や○う○な○嚴○肅○な○警○策○に○逢○ひ○雨○天○の○や○う○な○幽○玄○な○指○導○に○接○
 し○な○け○れ○は○到○底○健○全○な○發○達○か○て○き○な○い○て○あ○ら○う○と○思○ふ○(二二)

一○坂○を○登○る○の○は○艱○難○で○あ○る○苦○辛○で○あ○る○之○に○反○し○て○坂○を○降○る○の○
 は○容○易○で○あ○る○得○意○で○あ○る○我○輩○か○人○生○の○行○路○を○行○く○に○も○道○か○容○易○
 て○あ○り○得○意○で○あ○つ○た○な○ら○ば○其○道○は○降○り○坂○に○向○ふ○も○の○と○思○は○ね○は○
 な○ら○ぬ○又○困○難○辛○苦○に○出○逢○ふ○な○ら○ば○自○分○は○進○歩○の○坂○を○上○り○つ○つ○あ

る○も○の○だ○と○思○ひ○て○力○を○こ○め○て○こゝ○を○打○ち○越○え○る○や○う○に○せ○ね○ば○な
 ら○ぬ○(二三)

一○私○は○諸○君○と○共○に○如○來○の○慈○光○の○下○に○人○生○の○苦○味○辛○味○に○就○て○深
 い○興○味○を○有○す○る○力○あ○る○生○活○を○送○り○た○い○と○思○ふ○絶○待○の○力○の○主○た○る
 如○來○は○必○ら○ず○や○愛○子○等○が○こ○の○望○み○を○叶○へ○て○下○さ○るゝ○に○相○違○な○い
 と○信○す○る○の○で○あ○る○(二四)

(明治三十五年)

一。落 第

一。それがよいことか、わるいことかはさて置き、とにかく明治の新教育を受けるものに偉大な感化を及ぼすものは、試験である。其試験に二つの結果がある、一は及第、一は落第、及第は希望さるゝ方で、落第は恐怖さるゝ方である。苟も今の教育を受けた者の心に、この落第と云ふことの感銘のない人はなかるう。多くの人は之を経験した事があらう。かう申す私も小學校で一回、中學校で一回、徴兵試験の時と都合三回落第には経験のない方ではない。我は一回も落第した事がないと云ふ人でも、其人の心には確に落第なるものゝ恐怖は感せられて居るに違ひない。(一)

一。今のやうに學校を卒業するも、學校に入るも、文官になるも、判檢事になるも、醫士になるも、軍人になるも、總て試験に及第せねばならぬやうになつて居ると、其試験に落第すると云ふ事は、一身の榮枯浮沈に關係する事である。故に試験に落第して自殺した學生もあれば、落第を恐れて無理勉強をやつて、試験場で卒倒する學生もある。又この落第に依つて目的を變ずる人もでき、學校をやめる人もできる。この落第と云ふ題で小説を書いたら、一の悲劇が起きるだらうと思はる。私の知つた人などで落第した爲めに學問を止めた人もあり、落第したために放蕩家になつた人もある。又落第してから、大に奮勵して非常な立派な人となつたものもある。(二)

一。要するに、この落第なるものは、人を立派にもし、又だめにもす

る力を有する。されはいかなる人を立派にしいかなる人をだめに
するかと云ふに、落第によつて勇氣を失ふ人は落第によつてだめ
にせられ、落第によつて奮發する人は落第によつて立派にせらる
いは事實である。(三)

一この落第と云ふ事はつまり失敗の事で、事業に失敗した場合
と落第した場合と同じと心得て差支はないで、今私が話さうと思
ふのは、私共がこの落第の時、失敗の場合をいかい利用しいか
い過すべきかと云ふ事に就てである。(四)

一酖素だとか、モルヒネだとかは非常な毒藥である。然し之を良
醫がよく用ると、非常な藥となる。キネチは結構な藥だが、多量に飲
むと反つて毒となる。總ての物は其の利用の仕方、爲めにもな

り、不爲めにもなる。今落第と云ふ事も、さうで、誰だつて落第して氣
持がよいと云ふ者はなかるうが、こちらの心の持方一つでこの落
第に依つて、及第者の知らぬ大なる利益を得ることができさる。(五)

一彼のグラットストン氏は大學で九邊も落第したと云ふ、而も
あんな人物となつたてはないか、彼のトルストイ氏は大學でも落
第し學位試験にも落第したと云ふ、而もあんな立派な人物となつ
たてはないか、落第したからと云ふて決して失望する事はいらぬ。
失敗に出逢ふてうろたへ、憂うる人は決して大事はてさぬ。落第し
て精神の勇氣を摧く人は決して大人物とはなれぬ。世の諺に「七倒
び八起」と云ふことがある。これは面白い諺ではないか。七邊倒れて、
八邊起きて最後に起きると云ふので、つまり失敗失敗又失敗と失

敗を重ねた後に、遂に成效すると云ふ事である。(六)

一世の中の總ての出來事は皆な私共の爲めになるやう、語を換ふれば私共の利用のできるやうにできあがつて居る。即ち總ての事は如來の御働きである。故に私共は總ての事に遭遇して、之はいかなる教訓を如來か我に與へ給ふのであるかと考へねばならぬ。親や兄弟に別れるとか、子を先きだてるとか、財産をなくするとか、自分が病氣にても罹ると直ちに世を憤り、天を怨む人がある。之は淺はかな人である。この結構な如來の世界に居ながら、魔の世界に居ると思ふて居る人てなからうか。私共はどんな事でも皆如來が自分の爲めに巧んで下ださると思ふから、種々な事に就て、一々教訓を得やうと心懸ける。落第に就ても、そうである。或人は落第でも

すると直ちに試験官が不公平だとか、何とか云ふが、私はいんなことを喋々する人の品性に就て疑はざるを得ない。私はいんなつまらぬ、邪推をやつて居る代りに、其落第から大なる教訓を得たらばどうかと思ふ。(七)

一、艱難汝を玉にすとは古い言葉ではあるが、修養に心懸くる人には新らしい意義が、この格言より湧いてくるのである。落第は受験者に艱難を與へる。この落第が即ち、受験者を玉とする所以である。落第した時に問題を攻撃し、試験官を云爲するを止めて、先づこの落第は自分にいかなる事を教ゆるのかと云ふ事を考へ、自分で落第の所以を考察せねばならぬ。能く考へて見ると、落第は自分の足りない事を大に教へてくれるものである。どうか、こうか及第し

て行くよりは、反つて落第する方が、自己を完全にすると云ふ點では、大に利益のある事であると思ふ。故に私は知己の人がどうかさうか及第するよりも落第する方を望まざるを得ない。私は此人が落第によつて人物を磨きあげる事を望む。(八)

一 順境ばかりて逆境に逢はない人は、どうも人物が軽いやうで、どこかにぬけた所がある。成效ばかりて、失敗を知らない人も、さうである。及第ばかりて落第の覺えのない人も、どこかに足らぬ所がある。これは順境ばかりに居ると、自己省察と云ふ事を忘れるからである。齒か痛むと齒の事を思ふ、痛まない時は思はない、病氣にてもなると身體の事を考へるが、壯健な時は之を考へないやうに、順境ばかり及第ばかりの時は、どうも自分の能力を省察することが

できぬらしい。故に私はこの落第と云ふ事は、及第と殆んど同じ、否、な、其以上の價值のある事だと思ふ。故に私は落第したからと云ふて、其人を攻めぬ。然し其人が落第に依つて元氣を失ひ、教訓を得なかつたら、私は其人を攻める。機會の神の後頭は禿げて居ると云ふ西洋の諺の如く、機會は來る時に前から捕ふる事はできるか、逸し去つた後に捕へる事ができぬものであるから、この落第と云ふ、自己省察の好機會に出逢ふた人は、つまらぬ事に心を勞して、この機會を逸してはならぬ。(九)

一世には落第してから自分の方針を變へる人がある。これは自己省察の結果で、自分とは、とてもこの仕事には不適當であるとか、つて止めるのなら、それは悪い事ではない。然し大抵の人は、さう

でなくて一時の失望、腹立ちまぎれにそう云ふ輕はづみの事をやる人がある。これはあまり感心できない。一遍や二遍や三遍落第したからと云ふて目的を變ずるやうな人は世の中に立つて何をやる事もてきぬ人である。世の中のありふれた事をやるのなら一遍でできるでもあらうが、大發明をするとか、大事業をするとか、大著述をするとか云ふ時には、そうは容易に出來ぬ。一遍も二遍も三遍も五遍も十遍も失敗した後で漸く出來る位のものである。大事業をやるのは天才の事だと云ふが、其天才と云ふ者は勉強から來るので、忍耐と勉強とを有たない天才はない。故に何でも試験に落第したらするほど、志を堅固にして目的に進む人がほしいものである。私はクラッドストーン氏が九遍も落第するまで大學に居た忍耐

と勇氣とに感服せざるを得ない。(一〇)

一 小野道風と云へば、有名な書家である。此人が書家になつたのは、蛙が柳の枝に飛びつかうとして失敗し、飛びつかうとして失敗し、再三再四の後、遂に飛び就いたのを見て、奮然志を立て、年八十にして書に志し、有名な書家になつた。彼の蛙が一邊の飛びをこねを以つて、目的を他の方に向けたら、遂に柳に飛びつく事ができなかったらうに、辛抱よく、失敗に懲りずして試みたから、柳に飛びつくことができたのではないか。一邊落第したからと云ふて方向を轉ずるやうではろくな事はできない。これは青年諸君の大に注意せなければならぬ事であると思ふ。(一一)

一 彼のカーライル氏が十三年の苦心に成りし、『佛國革命史』の原

稿を朋友に貸して其朋友の下女が誤まつて之を火にしてしまつたにも拘らず勇氣を鼓して再び成就したと云ふ事は落第したか
らと云ふて、直ちに方向を轉ずると云ふ人の爲めには、深く味ふて
もらはねばならぬ事である。(二三)

(明治三十四年七月)

三。人の我が頭を搏つ時に

一。道を行く時、人ありて突然我が頭を搏つことあらば我等は、之に對して、いかなる行爲をし、いかなる心持ちになつて居るべきかと云ふは、私が今諸君に御相談しやうと思ふ題目である。(二)

一。人が我が頭を搏つと云ふには、二の場合がある。即ち第一は向ふの過失で計らず手が當つたと云ふやうな時、第二は向ふが故意に我が頭を搏つた時である。(三)

一。此第一の場合の如く、人が思はず、知らず、我が頭を搏つやうな事に出あつたら、私共は、人の過失を責め立てるやうな、女々しい行爲があつては、面白くないではないか、勘平が定九郎を殺したやう

なのは法律上でも過失罪と云ふて、あまり重い罪には問はないてはないか。私は自分が毎日のことに失策ばかりやつて殆んど過失の連続に生きて居るやうな者ゆへに、人が過失で私の頭を搏つやうなことがあつても決して怒りもせず怨みもせぬ。況んやそれを搏ち反へすと云ふことは勿論しないのである。私は人の過失を追窮するやうなぐずぐずしたことは大に嫌ひである。私は淡泊にその將來を誡めて、向ふが自己の過失と自覺しやうがしまいが、こちらからは之を責めないのが、男らしくて面白いと思ふ。(三)

一私共は自己の過失を責むるに酷でなければならぬと同時に人の過失を許すには寛大でなければならぬ。私は故なくして、人が私の頭を搏つやうな事があれば、いつてもその人の過失であると

思ふて居る。故に私は突然人から頭を搏たれるやうなことがあると、凡情で一寸むか／＼するが、そこに直ちに光明のきらめきが來て、彼は過つて我を搏つたのだと思ひ至る時に、心は光風霽月となつて、怒りや怨みは起つて來ない。罪の疑はしきは問はず。私共は大抵は過失として許して行くのがよいてはないか。(四)

一思ふて見なさい。一邊搏れた後で、向ふを搏ちかへしたところ、でこちらの痛みが去るでもなし、怒つて見たつて、こちらが苦しむ。けて何の得もない事だから、私はいる場合には笑ふて逃げるのが一番得策だと思ふ。(五)

一かう云ふ風に見て行くと、大抵の場合は、過つて我れを搏つたのだとして平氣で行くことが出来るのだが、前後の連絡上どうも

さうは思はれぬことがある。而して、向ふが故意に我を搦つたと考へらるゝ時に、こちらに起り来る感想は二つあるかと思ふ。即ち第一にはこちらが頭を搦たるに足ることをしたと自覺して居る場合、第二にはこちらが向ふの人に頭を搦たるに理由は少しもないと自覺して居る場合。(六)

一、この第一の場合には、つまり自分が何時か人の怨みを買ふやうな事をして置いたのが報はるゝと云ふやうなので、例へて云へば師直が由良之助に首を取られ、石川五右衛門が釜入の刑に處せらるゝと云ふやうな時の事である。(七)

一、第二の場合と云ふのは、平常より自分が別に人に怨まらるゝやうな事もしないし、人に搦たるゝやうな者でないと思ふて居るの

に、突然人から搦ちかけらるゝと云ふやうなので、例へて云へば與市兵衛が定九郎に殺され、判官が師直に其額を搦たるゝと云ふやうな時の事である。(八)

一、而して第一の場合に臨む時の如きは、世間一般の人も、大抵は因果の運びり合せと諦めるやうに見ゆる。故に私はこの第二の場合に就て、私共の取るべき態度を研究して見やうと思ふ。(九)

一、この第二の場合に於ても亦二個の場合がある。其一は少々はこちらの方に悪い事もあつたが、それが爲めに頭を搦つと云ふはあまりにひどいと思ふ時、其二は、まさり自分に搦たるに覺えがなくて搦たるのだと思ふ時、この二つの場合をよく檢して行く一つのやうである。なぜかと云ふに、所謂その自分に搦たるゝ覺

えがなくて搏たるゝと思ふ時の如きても、第三者より之を判して見ると、それがそうではない。與市兵衛が定九郎に殺されたのは、與市兵衛が懐に金を持つて居つたと云ふ立派な原因がある。金さへ持たなかつたら、與市兵衛は殺されなかつた。どれほど定九郎が悪人であつても、蓆を被ひつて居る乞食を殺しはせぬ。故に與市兵衛が定九郎に殺されたのは、其罪の半分は與市兵衛の懐中の金にあるのだ。世の中の竊盜犯の罪は、盗む者も悪いが、然しそれほど人の欲しがつて居る金を持つて居る者もよくない。よししか持つて居るにしたところが、それほど盗まれてならぬものなら、もつと大切にして番でもして居ればよいのに、自分が油断して盗まれたのだから、盗まるゝ罪の半ばはどうしても盗まるゝ者にある。故に盗人を

獄に投ずるならば、盗まれた人も獄に入れなければならぬ。等ではなからうかとは私が常より有する疑問である。(二〇)

一、ところが世の人は、人殺しがあつたと云ふと、殺した者のみが悪いやうに思ひ、毆打罪があつたと云へば、打つた者のみ悪いやうに思ふのであるから、人が自分の頭を搏つた時でも、打たれた自分の悪い所に眼が付かないで、搏つた者のみを悪く思ふは無理ではない。無理ではない、無理ではない、無理の土臺にたつて居る人としては無理ではない。然しよく理のわかつた人に取つては、少しも譯のわからぬ事である。そりや、向ふが過つて思はず搏つたと云ふならば、こちらに少しも搏たるゝ原因なくして搏たれもしやうが、向ふが故意にやつたとすれば、その故意の故意たる、何か一つの

目當がなければならぬてはないか、その目當のある所、即ち搏たるゝ自分に搏たるべき原因の潜んで居る所である。(二二)

一、何等の關係なくして、人の頭を打つ者は狂人にあらずんば過失であるにきまつて居る、狂人のすること、怒るも狂人じみた事だから賛成はできない、又過つて罪を犯した者を怨むなどは愚痴な事だから賛成はできない、かく云ふて來ると、自分が何にも搏たるゝ覺へなくて搏たるゝと感ずる時には、少しも怒りかつ怨む事はいらぬ、だからして嚮きに云ふた二番目の場合、即ち、まゐるきり、自分に搏たるゝ原因なくて搏たるゝと感ずるのと、向ふが故意に自分を搏つたのだと感ずるのと矛盾して居る事は明かである、されば、向ふが故意に自分を搏つたのだと感ずる時は、大なり、小なり、自

分の方に搏たるべき原因がなくてはならぬ。(二三)

一、さあ、それがわかると、今茲に、私共の前に残され居る研究の題目は唯一つである、即ち、少々は搏たれるやうな原因はないでもなかつたが、今搏たれて見ると、その報ひとしては、あまりひどうすぎると思ふて、怒つたり、怨んだりするのは、感心すべき事であらうかい、かゝとは、判決を待つて居る一題目である。(二四)

一、それ、私は始めに、世の人がこんな時に怒つたり、怨んだりするのは、理の通つた事かどうかを檢して見やうと思ふ、世の人は、自分ばかりあはせはないでもなかつたが、それにしても突然頭を搏つとはひどいと云ふのだが、此の言葉を檢べて行くと、自分がやつた悪は小で、向ふがやつた悪は大だ、故にそれを差引勘定すると

自分の方が損であると云ふに過ぎないところか、抑もこの大小と云ふ事があかしの事で、こちらが大と感ずる事を向ふが小と感ずるかも知れず、こちらが小と感ずることを向ふが大と感ずるかも知れぬてはないか、こちらでは自分が一寸した事を云ふたばかりなのに、彼が搏つのはこちらの損だと思ふかも知れぬ、然し向ふては殺しても足らぬ悪い事を云ひやがつたのに、頭を搏つてすますとは少々損であると思ふて居るかも知れぬてはないか、かうして見ると、悪の大小の差引勘定も變なものではあるまいか、要するに、この場合にも、私共は怒つたり、怨んだりするのはつまらない事である、と云ふ事が明白である、判官が師直に額を搏たれて怒つたのは私共の學ぶべき事ではない。(二四)

一、上來私は人が我が頭を搏つ時に、人を怒り、かつ怨むのはつまたぬ、不道理な事である事を述べた積りである、私がかう云ふぐわひに云ふて來ると、或人はかう云ふ、そりや君のやうに理屈的に考へて見りや、人が我が頭を搏つたからと云ふて、搏ちかへしたり、怒つたり、怨んだりするのはつまらない事はわかり切つて居るが、中々そう考へて後に行ふと云ふわけにはまいらぬから困ると、私は思ふ、私共人間が他の禽獸に勝れて一番結構なのは、この思慮を有する故である、故に人が人として生活する時には、常に思慮ある行動をしなければならぬ、若し人ありて私は思慮ある行爲はできぬと云ふたら、それは私は人間を廢業して、豕や犬と同等にならうと思ふと云ふと同じ事である、私共は苟くも思想を有する人間である、以

上は擣ては擣ち反へず、怒る、怨むと云ふやうな反射的行動にのみ満足すべきでないのではなからぬか。私共は燃えたつ反射的感想を常に冷たき思慮を以て冷やさねばなりませぬよし、今はてきぬにしても、私共は務めて思慮ある行為に近づかねばなりませぬ。(二五)

一私は、これから積極的に、人が我頭を擣つた時には、いかなる感想に住したらよいかと云ふ事に研究の歩を進めやうと思ふ。(二六)

一他の總ての場合と同じく、人が我が頭を打つ場合に於ても、私共の取るべき態度は、信仰の基礎にたいねばならぬ。私は未だ如來の慈悲のわからなかつた前は、人を見れば鬼だと思ふて來た。然し今日其光明十方に満ち給ひて、この私一人を訓へ守り下さるゝ如來を信じさせて預いた上より云へば、人は總て佛である様に

感ぜらるゝ而して今までは悪魔である仇敵であると思ふて居た人が今日では我を導き、我を恵み給ふ如來の化身であると感じ、故に私は一切の世の人が親のやうに思はれ、兄弟の様に思はるゝ。(二七)

一昔下野公助と云ふ人があつた。この人の母が至つて嚴格な人で、いつても氣にくはぬことがあると鞭にて公助の頭を打つのであつた。然し公助は一度も之に怒るやうな事はなかつたのみならず、或日母が例の如く鞭にて公助を打つと、其日に限つて公助はさめくと泣いた。母は驚いて、いつ打つても泣いた事がなかつたに、今日に限りて泣くのはいかな事であるかと尋ねると、公助は之れに答えて今日打たるゝ鞭が我に常よりも痛味を與へぬは定めて

あなたの力の失せ給ひしにやと思ひ、そが悲しくて泣きますと云ふた、何と面白い話ではないか、親が親切こめての慈悲の鞭だと思へばこそ、公助は頭を打たれつゝ、一度も不平を起さなかつたのである。(二八)

一 されば私共如来を信じ、世の人の總てが親のやうに感ずる者はいかに人より頭を擗たれても怒るやうな事があつてはならぬ。反つて擗つた手が痛まなかつたかといた、わる位でなければなりません。(二九)

一 茲に亦ありがたい話がある。法然聖人の弟子、熊谷入道、蓮生法師が墨の衣、墨の袈裟、一簍一笠と云ふ風で中仙道を旅して行く、向ひの方から大名の行列が来る、下に下に、と叫んで来るから、路傍

の松の木の蔭によけて佇んで居ると、この行列の主人が馬の上から蓮生法師の頭へ向けて啖をはきつけた。この時蓮生房が其の馬上の人を見ると、こはそもいかに、宇津宮彌三郎と云ふて、元は自分と同じく源氏に事へて居つた朋友である。こゝで蓮生房も武士の昔を思ひ出して一時は怒り、一時はくやしがつたが、直ちにその本心に歸り、あゝありがたかなや、南無阿彌陀佛、朋友からもかくほどこに蔑まるゝこの私を攝取不捨の妙用で御助け下さるとは何たるありがたい事ぞや、あゝかの宇津宮彌三郎は我朋友の宇津宮ではなくて、如来かこの蓮生を歡喜の花園に導き給はんが爲めの御方便であつたかと、ひたすらに喜びつゝ、御念佛を稱へながら、黙して歩み去つた。宇津宮はこの體に感心して、あゝ今までは鬼をも拉

人の我が頭を擗つ時に

く熊谷がどうしたらかくも立派な心になれたのであらうかと自分もちらやましくなり馬の轡を反へして蓮生房に逢ひ終にこの宇津宮も法然聖人の弟子となつて他力念佛の信者となつたこの話も私共に尠からぬ教訓を興ふるではないか(三〇)

一私共が一度ひ如來の光明に攝取せられし上からは既に如來の子である故に私共の身體は如來が常に影の形に副ふ如くにして守つて導引いて下さるゝ故に私共如來を信ずる身になつた者は人から頭を擗たるゝ事があつても其内に如來の教訓を味ひ如來の導の御手を取りはづさないやうにせねばならぬ故に私共は人に頭を擗たるゝ時にも歡喜の思ひに住することが出来るのである私共の胸には春夏秋冬いつでも歡喜の花が咲いて居るので

ある(三一)

一終りに私は云ふ上來私は人が我が頭を擗つた時にはいかなる態度を取るべきかを研究して來たがこの研究は總て人が自分を誹つた時にも人が自分を陥入れた時にも人が自分の利益を害する時にも他國が我國を害する時にも應用して考へてもらいたいと私は望む所である而して總てかゝる場合に臨んだ時には十字架上で殺されたキリストが敵を怨まざりし事毒を飲んで死んだソクラテスが政府を怒らざりし事釋尊が提婆達多に成佛の記前を授けられた事親鸞聖人が山伏辨圓を許された事を思ひ浮べて直ちに如來矜哀の御手にすがり淨樂の乳房を含ませて頂きたいと私は念して居る道友諸君よどうか御光の下にこの道の上を

人の我が頭を擗つ時に

手を携へて行かうではありませんか。(三三)

(明治三十四年十一月)

四。男らしき服従

一、男らしき服従即ち *manly obedience* とは英國の詩人ヲルツォルスカ教えた言葉であるが、一寸さいた丈けてもなか／＼面白い深遠なる趣味のある言葉である。私は此頃に至つてます／＼この言葉の面白味を感じるやうになつた。(二)

一、獨立とか、自由とか、權利だとか、義務だとか云ふ事で育てあげられた明治の青年には服従など云ふことは殆んど不倶戴天の怨てもあるやうに思はれて居りはせぬか。かく云ふ私も二三年前までは實際、そんな事が大に嫌ひて、服従だとか、従順だとかと言ふ者を見てさへ、腰抜け奴か何をぬかすんだと云ふやうに思ふて

輕蔑した位である。今から七年程前であつた。或會て私の年々への友人か夢太の

むつとして歸れば門の柳かな

の句を引ひて、從順の徳を稱へた時などは私は口角泡を飛ばしてその非を辯し、阿諛なり諂佞なりと排斥した事があつたが、今から思ふて見ると、いやはやれ耻しいわけてたゝ自分は若かつたのである。つくづく考へて見ると、その時私が排斥した友人の説かなかくよかつたのである。私は二三年前にこのことに氣か付いてからは、今迄輕蔑して居つたその友人をえらいと思ふやふになり自分は行きすぎ者であつたと思ふやうになつた。で、今私か茲に仔細らしく、男らしき服従などと耳新らしく書きたてるのも偶然で

はないのである。(三)

一私は元はルーテルカウキテンベントの校門前で法皇の破門狀を焼いたことや、ミルトンがその貧に迫れるにも拘はず帝王の贈物を拒んだことや、などを非常に愉快なことに感じて居つたが、今日で見るとまだ稚氣を免れない様な氣味がする。今日では基督がユタに賣らるゝことを知りながら柔順に饜應に趣きしことや、西行法師が門前へ出て小供へ與へるやうないりもせぬ銀猫を、頼朝がやらうと云ふがまゝに貰ふたことやなどを奥ゆかしく感ず、同じ人の上でもそうであつて、以前に面白いと感じたことと、今日面白いと感ずることと、異なつて居るやうである。以前は道元禪師が時の天皇から紫衣を賜つたにも拘らず二遍迄固辭したのは

えらいと感じたのだが、今日ではそのことより道元禪師か一生着なかつたやうな不用の品物を三遍目に天皇より賜つた時にはすなをに受けられたことをゆかしく感ずる。又以前は釋尊か帝王の妙衣を捨て、糞掃衣を着られた勇氣を面白く感じたが、今日ではそれよりも次の事實の方がゆかしく思はる。(三)

一 醫士の耆婆か其の國の帝王頻婆娑羅の病を癒やしたとき、帝王か耆婆に天下第一の妙衣を與へやうとせられたら、耆婆か私の如き者がさる着物を着るのはいかなから、それを着るに適した人に贈つて下さるまいかと云ふた。するとそれは誰かとの帝王の問て耆婆が其は釋迦牟尼であると答えたので帝王はその衣を釋尊に贈られた。ここに於て釋尊はそれを受けて着られた。私は

ここに云ふにははれぬ趣味があるやうに思はる。エヒクテタシか、愚人輩がよつさくと祭りの踊りをやつて來れば、こちらもそれに交りてよつさくとやる事じやと云ふたことに趣味を感じて居る。今日の私は釋尊が捨てた美衣を人の捧くる儘に受け給ふた。その落付いた、男らしき服従には感せずには居られぬ。(四)

一 親鸞聖人が念佛宗を宣傳したりとの故を以て流罪に處せられた時の事を、主上臣下、法に背き、義に達し、憤りをなし、怨を結ぶ。茲に因て眞宗興隆の大祖源空法師、並びに門徒數輩、罪科を考へずして、猥りがわしく、死罪にをこなひ、或は僧の儀を改めて、姓名を賜ひて遠流に處す。予は其一なり。と記されたるを、こよなう面白きこと、思ひし私は、これよりも、流罪に處せられながら、大師聖人若し流

刑に處せられ給はずば、我また配處に趣かんや、我配處に趣かずんは、何を以てか邊鄙の群類を化せんや、これ尙師教の恩致なり」と言はれたる方がけだかいやうな、奥ゆかしいやうな感じがする。(五)

一。つまり以前の私は蚤を取つてばかりとつぶすことをえらいと感し、鳴いて來る蚊を扇で拂ふことをきついと感して來たのであつたが、今日の私は蚤や蚊か血を吸ふて居るのを平氣な顔で見で居ると云ふ人がえらいたふといと感ずる。私の亡父は妙な人で、虱が身軀中に一ばいにたつて居ても平氣で居るし、夏の夜蚊の澤山居る時でも平氣で讀書に耽つて居られた。人ありてかゆい事はないかと尋ねると、なんともないと答えて笑ふて居られるが常であつた。て私の村の者などは私の父がえらかつたものだて、蚊が

恐れて近よらなかつたのだと云ふて居るが、實際はそうてないのて、私の父か男らしい服従をやつて居られたのである。この一點で私は自分の父を古今の高僧知識の中に運ねても耻しない人であると信じて居る。始めの内は私は自分の父を馬鹿のやうに感じた。何かと云ふと、自分の身軀の血を吸はるゝを平氣で居るなどは、随分のんきな話で、自分の家に盜賊がはいつて物を取つて行くを黙つて見て笑ふて居るやうなことで、普通一般の人のやる事が、發明な、利巧なやり方であるとするれば、私の父のやつたことなどは丸きり馬鹿のやる事である。世間では馬鹿と云へは誰でも嫌ふのだが、今日では私はどうもこの馬鹿が奥ゆかしくてたまらぬ。自分の家の棟に火か付いて居るにも拘はず、平氣で讀書でもして居ると

云ふ人を世間では馬鹿落付きと云ふが私はこの馬鹿落付きがかく面白いと思ふ(六)

一馬鹿といふことで思ひ出したが、トルストイの小説に『馬鹿者イバン』と云ふがある。この小説の主人公たるイバンはなかく私の氣に入つて居る。(七)

一イバンには兄弟が三人ある、一人は権力がすきて軍人になり、一人は利益が好きで商人になり、一人は啞の女で、イバンと共に農業に従事して居る、悪魔の王が三正の使を出してイバンとその軍人と商人の兄弟を迷はさうとし、軍人と商人とはまんまと慾の網に引きかけられて穴に落ちたが、イバンは馬鹿で、慾もなければ慾もしない、それに避易して三正の悪魔は終に死んでしまつた、悪

魔の王は使が飯つて来るのを待てども歸つて来ないから自分てだしかけて行つたが、とうとうイバンの馬鹿にまけて死んでしまふ。世俗の唄に

阿房じや阿房じやと輕蔑するな阿房が世を持つ世帯持つと云ふてあるやうに二人の利巧な兄弟は零落したが、阿房のイバンと啞の妹とはどうかこうかして居つて二人の兄弟を養ふてやつた。古語にもあるやうに、實に、その恐や及ぶべからず、利巧者には打ち勝つた悪魔は愚人イバンには負けてしまつた所か面白いではないか。後に或事から、イバンが國王となつた、イバンは王の位に即いて農業をやつて居る、租税も取らねは、軍隊も置かぬ、他國から攻めて来れば向ふの欲する者を與へよと云ひ、大臣か官人にや

る給料かないと云へば皆が百姓になれと云ふ。或時人民の家へ盜賊がはいつたので國王に訴へたところが、イバンの云ふやうには「よろしい、汝が持つて居たから取られたのである」と云ふて一向に盜賊の方をせめない。そこで人民がこの國王は馬鹿だと云へば「よろしい」と云ふて平氣で居る所などはよほど面白い國か亡ぶるといふても「よろしい」と云ひ盜賊かはいつたと云ふても「よろしい」と云ひ、人民か馬鹿だといふても「よろしい」と云ふて居るのは面白いではないか。私は世の中の所謂利巧者が、人から君は馬鹿だと云はるゝとなに我は馬鹿ではないと辯ずるよりも、馬鹿たるイバンが馬鹿と云はれても「よろしい」と云ふて居る落付きがなか／＼貴いと思ふ。(八)

一どろせ利巧者の智慧者の今の世の人からは馬鹿だとも云はれやうし、或は狂人とも云はれやうが世間が何と云はうが儘よろしいと受けながす所はなか／＼愉快ではないか。こんなくわいに人が何と云はうがそれに抵抗しないてはいは「よろしい、よろしい」と平氣で行ける。そこが「男らしい服従」のできる。ところが「男らしい服従」とは、自分に守るところがあり、而も人と争はず、抗はさることである。(九)

一この馬鹿者イバンはトルストイの理想の人である。トルストイは絶待的に無抵抗を稱道する人で、其著『神の王國』に云ふて居る。害心を起さず、悪言を挾まず、總ての人を愛するは理想なり。その理想に達せんには人は服従ならざる可らずとは、これ吾人が

隣人に告ぐる第一の命令なり。總ての抵抗を去れよ。惡には善を返し、善には忍耐に、裏衣を取らんとする者には上衣を與ふる。これ理想なり。汝の敵を愛し、汝を賤しむる者に善を爲す。これ理想なり。この命令の精神を順奉せんが爲めには、人は敵を害するを得ざれ。親切に敵と語れ。又總ての動物を同等に待遇せよ。(二〇)

一、たとひいかなる場合があつても、抵抗はするな。服従的であれとはトルストイの説く處である。彼は又『基督的生活に就ての書簡』の中には一層明白にこのことを論じて居る。

小兒を殺さんとしつゝある賊を見る時に人はいかゝ處すべきやと問はゞ、抵抗に慣れた常の人は賊を殺して小兒を救はんと云はむ。されど思へ、たとひ賊が小兒を殺さんとしつゝありと

するも、實際に小兒が殺さるゝや否やは不明の問題なるが故に、人若し賊を殺さば、これ殺人にあらずして何ぞや。或は賊の生命よりも小兒の生命は必要なり、と云はんか。誰か小兒の未來がいかになりて、今殺さざらば生くべき賊の未來がいかになるべきかを知る者ぞ。これを知らずして賊を殺さんは理に於て然るべからず。人若し基督教徒にして神を認め、神意を充たすを生活の意義とする者ならんには、賊いかに残酷ならんも、小兒いかに可憐ならんも、神與の大法を棄て、賊が爲さんとすることを賊に爲すは、根據あることなるか。彼は賊に辯疏するも可なり、身を以て小兒を蓋ふも可なり、されど、こゝに彼が爲し得ざる一事あり。そは天與の充實のために生くる彼はその大法を捨つるを得ざ

るなり。悪教育又は動物的本能は小兒否自己を救はん爲めに賊を殺すを敢てせむ。されどかゝることを爲すは正しからず。而も彼は之を至當と思ひ慣れたり。(二)

一何たる痛快の文字をや。今の権利義務的悪教育に薰陶せられたる人には恐らくかゝる文字は解し得られざるやも知れず。今の人には盜賊を獄に投ずるは正しきとに思ひ、殺人罪の者は殺さるゝが當然と思ひ、法律は正當防衛と云ふ名の下に小兒を害せんとする賊を殺すを善と認めて居る。こんなぐわいならば、齒にて齒を償ふと云はうか。暴を以て暴にかふと云はうか。私はどうしても世の人が善の悪のと云ふて居るのは水かけ論のやうに考へらるゝ。私は他人から權利を害せられても平氣で居ると云ふ人が欲しい。而

して私自らかそんな馬鹿になりたい。私はいかなる事に出逢ふとも平然として男らしき服従をやつて賊の及に斃れるやうな人例へばクリトの脱獄を勧めたのを排斥して平氣で毒を飲んで死んだソクラテスのやうな人はたとい馬鹿であつたとしても實に慕はしい平氣で神よ彼等を許せと叫んで十字架の上に死んだ基督のやうな人は今日の権利義務の思想よりすれば馬鹿な話で、盜賊に報酬金を持つて行くやうな馬鹿なことなれど、私はこんな人を渴仰せずには居られぬ。私は灸をすへて、あついと云ふてはねかへる人より、じつと忍へて男らしい服従をやつて居る人の方がえらいやうに思ふ。又喜んでこの服従をやる人があらば、尙えらい人だと思ふ。(二三)

一、先度も或處で某氏と遇ふてだん／＼鑛毒問題のことを聞いて大に同情を表する點もあつたが、氏が五ヶ年かゝりて鑛毒地の人民に權利思想を吹きこむに盡力したと云ふたのを聞いたときには、いらぬ御世話をやつたものだと思ふた。私が鑛毒地の人民に云ひたいと思ふて居たことは彼等に權利思想を捨てよと云ふことであつた。男らしき服従をせよと云ふことであつた。然るに氏のみならず多くの人が人民の爲めにすると云ふて、人民に不安を與ふる處の根元たる權利思想を人民に吹きこむとは、大に心得ぬことである。私が考ふるには、人民が苦むか苦まないかは、其源因は足尾の銅山にあるのではなくて、自分自分の心の中にあることである。エピクテタスに云はいたならば、鑛毒は田地の害であらう、然

し人民の害ではないと云はう、産婦の乳の出ず、小兒の發育しないのは、乳や小兒の身體の害であらう、然し人民の害ではない、と云はう、尤も人民に苦痛を與ふるは人民の心の中にある權利思想から起る憤怒や怨恨である」と云はう。(二三)

一、今の教育が全體どうか、國家の隆盛のためとか、人民の幸福のためとか云ふて、頻りに人民に煩悶の根本たる權利思想を吹きこむ。ひなんどはトルストイの云ふやうに、實に惡教育であると云ふてよい。他人はいざ知らず私だけは、今日のところこのつまらない權利思想などから逃れて、惡教育や又は動物的本能を淨めて、少しは昌平な生活が營みたいとは望んでも居り、少しは實行もして居る。私の生活の意義は實にこの男らしき服従から來るのである。(二四)

一他人から財産をとられ、名譽を損ぜられて平氣で居る人があつたら、世の人は確かに愚と呼ぶてあらう、馬鹿と名付つくるてあらう。ところが、その馬鹿に就て面白い話がある。

或禪宗の寺に至極評判のよい和尚さんが居つた。徳高くして其名遠近に轟くと云ふ風であつた。ところが、この寺の門前に豆腐屋があつて、その豆腐屋の娘が定まつた夫もないのに孕んだ。そこであれの子じやかれの子じやと風説とりくの中に、娘は其實を明さば父に叱らるべしと思ひ、なんでも寺の和尚は高僧の評判がある人じやて、あの人の子じやと云ふたら、よけいに叱られはせぬだらうと思ふて、妾の子は寺の和尚さんのじやと云ふた。それを聞いた父親は驚くまいことか、怒るまいことか、直ちに和尚の所へ行つ

すまぬ人じや、養育料をこれく出しなさいと云ふと、和尚平氣なもので、あゝそうかと云ふて云ふが儘に金を與へた。面白いじやないか、常人ならば何を云ふのだ、詐欺師奴、ユスリ奴と譴り飛ばすところだが、そこが和尚、自分の権利を蹂躪せられながら、あゝそうかと云ふて、云ふが儘に金を與へたとは興味のある話ではないか。こんなぐわいだから、その村は云ふに及はず近村に至る迄、あの和尚は狸であつた、狐であつたと、前の評判のよかつたに反對に、評判かわるくなつて來た。然しこの和尚中々平氣なものだ。かうなると娘も氣の毒でたまらぬやうになり、その實を父親に話すと、父は二度びつくりをやつて娘を連れて和尚の處へ謝まりに行つた。その時和尚また平氣なもので、あゝそうじやつたかと云ふて居る。こゝが

えらい所だ。常人だとこゝ一番と大に責めるところだが、和尚はそ
うはしない。名譽回復などは云はないで、あゝそうじゃつたかと
云ふたきりとは面白いではないか。與へらるべき物は求めざるに
至る者で、かくてこの和尚の名は以前とは一層高くなつた。この和
尚は馬鹿であつたらうとは、權利思想に溺れて居る人が云ふ事であ
らう。ところがこの馬鹿は大なる成效を得たのである。この人は
誰あらう、臨濟宗の碩徳白隠禪師其人であつた。(二五)

一 衆生本來佛なり。

水と氷のごとくにて、

水を離れて氷なく、

衆生の外に佛なし。

衆生近きを知らずして、

遠く求むる愚かさよ。

たとへは水の中に居て、

渴を呼ぶが如くなり、

長者の家の子となりて

貧里に迷ふに異ならず。

六趣輪廻の因縁は、

己が愚痴の暗路なり。

暗路に暗路をふみそへて

いつか生死を離るべき。(二六)

一 この深奥微妙なる歌はこの馬鹿者、他人の無理にだまつて服
従した馬鹿者の口から出たのである。この馬鹿者はどう云ふて居
るか。昌平と淨樂との水の湧き出る佛の泉を知らぬものは愚じや
ぞやと云ふて居る。私はどうか世の權利家よりは馬鹿と云はれて
もよいが、白隠禪師のこの教だけは學びたいと思ふのである。(二七)

一 かの有名なラスキン、『近世畫家』や『ベニスの石』の著者として有
名なるラスキン、私か米國のエマーソンと共に珍重する文學者ラ

スキンは實に面白い。即ち權利家に云はすると馬鹿なところが面白(ラスキン)

一、ラスキンが蘇格蘭を旅行した時に、その妻の肖像をジョン・モ
レリスと云ふ畫家に畫かした。すると畫家と妻との間に戀情が起
り、妻は畫家と結婚せんがために離縁の訴訟を起して、ラスキンは
自分を虐待する」と訟へた。するとラスキンは平氣で其を承諾して
やつた。面白いではないか。妻の無理に怒らないで服従するなどは
面白いではないか。男らしいではないか。ラスキンは親から譲り受
けた金が三百萬圓あつたのを十二萬圓丈け残して残りは悉く人
に與へた。これらも或一方から考へると馬鹿なことだ。然しこの馬
鹿氣なところがあつた人だから、次のやうなけだかい事が奮けた

のであらう。彼は「建築の七灯」の中に云ふて居る。(一九)

一、人が自由と呼ひなせる奸詐なる幻影の概念は誤れるよ。之を
追求するは狂へるよ。かゝるもの宇宙の何處にかある。決してある
能はざるなり。星は自由にあらず、地球は自由にあらず、海は自由に
あらず、而して我等人類は最重の刑罰の爲めにそが輕蔑と類似と
を有す。……服従は更に一種の自由に於て發見せられ、又單なる
僕従となるともあり、されど自由なるものは服従の能く完成せら
るゝ爲めにのみ許さるゝなり」と。(二〇)

一、萬物相關の理から推して自由は世に存在すべからざることを
云ひ、服従を論ずるところにラスキンの面白いところがあるので
ある。彼の妻に對して男らしき服従をやつたのはこの据りから來

たのである。私はルソーのやうに自由じや、權利じやと云ふて人に苦みを與へる人よりは自由の空想なることを示し、従順を完全する爲めに自由があるのだと喝破して人に昌平の氣を吹きこむラスキンのやふな人が貴いやうに思ふ。(三二)

一昔釋尊の弟子舍利弗が布施の行をやつて居られたところへ、一人の婆羅門が来て、汝が布施の行をやると云ふなら、我に汝の眼を與へよと云ひしところ、舍利弗は何の造作もなく自分の眼をとりつてやつた。すると婆羅門は之を手に取りつて見て、こんな穢なものはいらぬと云ふて地に投げつけた。この時舍利弗が一念むつとしたので、今迄積んだ修行の功を臺なしにしてしまふたと云ふ話がある。財産はをろか自分の身軀でも人が乞ふが儘に與へる

と云ふ男らしい服従は實に面白いではないか。婆羅門が眼球を捨てた時にも、舍利弗が投げるものをして投げしめよと平氣で据つて居つたらよかつたのであるに、それをせなんだのは惜しかつた。スカンデナピアの聖人の所謂「ウートンが與へし鐵心のある人」でなければ、この平氣と云ふことはなかくできる事ではない。(三三)

一四五日前獨逸に居る友人が一月發行の雑誌「ツール、グッテン、スツンデー」を贈つてくれたが、その雑誌の中にある繪に面白いのがある。畫題は「別離」とか云ふので、何でも軍人が將さに出陣せんとしてその妻と別るゝところを畫いたので、後景には馬丁が馬の轡を執て來るのを畫いて、中央に軍服いかめしき將校と柳腰艶々たる美人とが相抱いて別離を悲んで居るのを顯はしてある。この繪の

將校が將さに泣き出さんとして敢て泣かざる克巳の容貌がよく現はれて居て實に戰場の花と思はしむるのである。(三三)

一此頃上野公園に開かれてある繪畫展覽會に出てある横山大觀の筆に成れる『茶々が淵』と云ふ繪もなか／＼よく男らしき服従を爲す勇者が畫かれて居る『茶々が淵』とは何千丈ともわからぬ斷崖である。その斷崖の下白濤渦巻き來るところに小舟の弄ばるゝあり、その舟中に一人の僧あり、神色自若として綠草の上に座して胡蝶のゆくへを眺むるやうな平和の顔色をして居るのは、いかにもけだかく貴く思はるゝ。(三四)

一『別離』の將校は人情の波にうたれながら、武士魂の命令に男らしく服従して居るところが面白い。『茶々が淵』の僧は恐ろしい天然

の攻撃にあひながら之に抵抗もしないで平氣で居るのは、いかにも男らしき服従である。武士は食はねど高揚枝などい云ふ語は實に愉快な言葉である。(三五)

一ニイチエは奴隷道德によれば、善人は鈍物の代へ名てあると云ふて居るが、私はこの鈍物がとりもなをさず、彼が所謂貴人なり超人なりと思ふ、私は疑ふのである。ニイチエが何故に強者の強のみに強を認めて、弱者の弱の上に強を認めなかつたのであらうと、如來にたよるなどい云ふ私はニイチエから云はるゝとやはり鈍物の一人である弱者の一人である。然しこの弱者が宇宙の大法に向ふてなすところの男らしき服従即ち如來をたのむ金剛堅固の信心の強さを持つて居る事を看過してはならぬ。世には馬鹿力と

云〇ふ〇が〇あ〇つ〇て〇な〇か〇く〇侮〇り〇難〇い〇も〇の〇て〇あ〇る〇私〇共〇に〇若〇し〇強〇い〇所〇が〇
 少〇し〇て〇も〇あ〇る〇と〇す〇れ〇ば〇そ〇れ〇は〇宇〇宙〇の〇大〇法〇に〇向〇ひ〇て〇の〇男〇ら〇し〇き〇服〇
 従〇て〇あ〇ら〇う〇こ〇の〇か〇たい〇服〇従〇心〇を〇有〇す〇る〇弱〇者〇は〇ニ〇ー〇チ〇エ〇の〇超〇人〇と〇
 角〇力〇を〇取〇つ〇て〇も〇な〇か〇く〇負〇は〇し〇な〇い〇(三六)

一〇大〇体〇私〇共〇が〇人〇と〇物〇と〇に〇喜〇ば〇し〇い〇服〇従〇の〇て〇き〇ぬ〇と〇云〇ふ〇の〇は〇未〇
 だ〇女〇々〇し〇い〇自〇己〇と〇云〇ふ〇考〇が〇離〇れ〇ら〇れ〇ぬ〇か〇ら〇て〇あ〇る〇私〇共〇が〇無〇我〇に〇
 さ〇へ〇な〇つ〇て〇居〇れ〇ば〇何〇物〇に〇て〇も〇誰〇に〇て〇も〇い〇か〇な〇る〇場〇合〇に〇て〇も〇い〇か〇
 な〇る〇事〇に〇て〇も〇喜〇ん〇で〇服〇従〇が〇て〇き〇る〇筈〇な〇の〇だ〇と〇こ〇ろ〇が〇今〇日〇の〇私〇共〇
 は〇な〇か〇く〇そ〇ん〇な〇鹽〇梅〇に〇は〇ゆ〇き〇か〇ぬ〇る〇こ〇と〇が〇あ〇る〇私〇は〇我〇慢〇が〇か〇
 つ〇て〇い〇て〇人〇や〇物〇に〇容〇易〇に〇服〇従〇が〇で〇き〇な〇い〇か〇ら〇私〇が〇ど〇う〇あ〇つ〇て〇も〇
 抗〇す〇る〇事〇の〇て〇き〇な〇い〇宇〇宙〇の〇大〇法〇自〇然〇の〇真〇理〇に〇絶〇待〇的〇に〇服〇従〇す〇る

の〇て〇あ〇る〇私〇が〇い〇か〇に〇思〇ふ〇て〇動〇か〇す〇こ〇と〇の〇て〇き〇ぬ〇絶〇待〇力〇に〇服〇従〇
 す〇る〇こ〇と〇に〇よ〇つ〇て〇今〇迄〇は〇頭〇が〇下〇ら〇な〇か〇つ〇た〇人〇物〇や〇事〇件〇に〇て〇も〇男〇
 ら〇し〇い〇服〇従〇を〇す〇る〇こ〇と〇が〇て〇き〇る〇そ〇の〇時〇は〇私〇は〇人〇物〇其〇物〇事〇件〇其〇物〇
 に〇服〇従〇す〇る〇と〇思〇ふ〇と〇何〇だ〇か〇我〇慢〇や〇我〇情〇が〇起〇つ〇て〇容〇易〇に〇服〇従〇が〇て〇
 き〇な〇い〇が〇宇〇宙〇の〇大〇法〇た〇る〇盡〇十〇方〇の〇無〇量〇光〇如〇來〇の〇命〇に〇従〇ふ〇と〇思〇ひ〇
 自〇然〇の〇法〇力〇た〇る〇阿〇彌〇陀〇如〇來〇の〇導〇き〇に〇服〇す〇る〇と〇思〇ふ〇と〇何〇だ〇か〇愉〇快〇
 に〇服〇従〇が〇て〇き〇る〇の〇て〇あ〇る〇(三七)

一〇要〇す〇る〇に〇私〇の〇宗〇教〇は〇弱〇き〇自〇分〇に〇打〇ち〇か〇つ〇と〇こ〇ろ〇の〇宇〇宙〇の〇大〇
 法〇に〇向〇つ〇て〇大〇膽〇に〇眞〇摯〇に〇男〇ら〇し〇く〇服〇従〇す〇る〇こ〇と〇に〇よ〇つ〇て〇成〇立〇し〇
 て〇居〇る〇而〇して〇私〇の〇倫〇理〇の〇根〇本〇は〇こ〇の〇如〇來〇の〇命〇令〇に〇従〇ひ〇導〇き〇に〇服〇
 す〇る〇の〇心〇を〇以〇て〇人〇に〇對〇し〇動〇物〇に〇對〇し〇物〇に〇對〇して〇男〇ら〇し〇き〇服〇従〇を

五。一念の満足は永遠の満足なり

一蓮月尼の歌に

宿かさぬつれなき人のなさけにておぼる月夜の花の下臥

と云ふがある。私はこの歌を味へば味ふほど面白味が出て来るやうに感ずるのである。旅人が日暮になつてどこに泊ればよいか一向定まつた宿もないので、とある家の戸をたゞいて一夜の宿をたのみと、この家の主人は無情にも泊めてくれないしかたがないから、その家を出て、行くと櫻の花の咲いて居る堤があるから、その堤の草の上にな一夜を明かした。その夜横になりながら朧月が花の梢にかゝつて居るのを見て、非常の情味を感じたものだから、

始め宿を断はられた時は、つれない人だと思ひもしたが、今思ふて見ればそうではない。若しも宿をたのんだ時に、あの家の主人が心よく泊めてくれたならば、こんなぐわいに花の下にて月を見ると云ふ愉快もなかつたであらうと考へて來ると、始めつれなしと思ふた人が反つてなさけ深い人のやうに感ずるやうになつた。宿をかさぬはつれない人である。然しこのつれない人があつたればこそ花の下にて月見が出来たと思へば、反つてこの人はなさけ深い人であるやうに感ぜらるゝ。この箇の感情を表はしたのが、蓮月尼のこの歌である。(一)

一こんなことは世の中にはいくらもあることで、小供の時分にはよく譴る人などはつれない人であると感じて居つたのが、年が

行つて見ると反つてこのつれなかつた人が親切の人であつたやうに感ぜらるる。その當時には自分を害するものゝやうに感じたことが今思ふて見ると自分を利したのであると思ふことがある。かくのこゝとく世の中の事物は見やうに依つて善ともなり悪ともなり美ともなり醜ともなり真ともなり偽ともなるのであつて、事物其物に害もなければ利もなく、人其者に親切もなければ不親切もない。(三)

一宿かさぬ人は不親切な人であるに限られない宿をかさないと云ふ方面から見れば不親切でもあらう。然し花の月を眺めさしてくれた人だと云ふ方面から見れば親切な人ではないか。頭をなぐる人が悪い人とは限られない頭をなぐると云ふ點から見れば

つれない人でもあらう。然し自分の缺點を誠めてくれると云ふ點から見ればなさけある人ではないか。世の人は盗む人は悪い人であると思ふて居るが、必ずしも然らずである。人の物品を盗んで人を困らせる點から云へば盗人は害物であらう。然し人の物品を盗んで人がよるべからざるものによつて迷ふて居るのを警醒すると云ふ點から見れば盗人は善知識であるではないか。世の人は蠅は害蟲であるとのみ思ふて居る。蠅が人身にとまり、食物にとまつて卵を産みつくと云ふ點から見れば蠅が人の害物かも知れぬ。然し蠅が瓜や西瓜の花の間に飛びまはつて多く實らせたり、又他の害蟲を殺したりする點から見れば蠅は人間の味方かも知れぬ。ではないか。かうして考へて見ると、何事によらずこれが害だの利

だのときまつて云ふ事はできぬ(三)

一私共が物に妨げられ又は人に害せらるゝと云ふ事はない私共は若しも妨げられ害せらるゝことがあるならばそを害するものは私共の心中の煩惱である私共は常に外物に害せらるゝやうに思ふて居るがまちがひである宿かさぬ人に害せらるゝと思ふ人は花の梢の月を見るの樂みを解せぬ人である頭をなぐる人に害せらるゝと思ふ人はそれに依つて受くべき教訓を受けることのできぬ人である此種の人は一生涯不満足不平でたまらないで死ぬ人である實に憐むべき人である(四)

一旅人がつれなき人をなさけある人と見ることのできるのは現に今花の梢に月を見ると云ふ満足があるからであるこの満足

を土臺として見れば、嚮に宿をことわつた人はこの満足を導いた人であつた。そうして見れば、この人はつれない人ではなうて、なさけある人である。と云ふ事がわかつた。(五)

一今もそのやうに私共の心が満足に住して居るならば、この満足の現在を導いてくれたのが私共の過去ではないか。この満足を導いたのは過去なりとせば、過去には私共に不親切なるものが一つもなかつたやうに感ぜらるゝのではないか。東京がよいところであると思へば、東海道の道中が皆このよき東京への道なればよい道である。と云はねばならぬ。現今の自分の位置が一番よいと思ふたならば、以前に學校で落第したことも、放蕩をやつたことも、皆今日の道路であつたのではないか。この道路がなかつたら、今日の位

置が得られなかつたかも知れぬではないか。ぞうして見ると、落第
 や放蕩が光ある過去のやうに感ぜらるゝてはないか。私は私の精
 神が純潔になり満足に住する時に、私の過去は皆なこの今日の満
 足の道であると思ふから決して悪い道であつたとは思はな
 い。今までは失敗であつたと思ふた事も、へたであつたと思ふた事
 も皆今日の満足に至る階段であつたと思ふて見ると、今迄悪いと
 思ふた過去が非常に光ある様に感ぜられると同時に精神がこ
 の満足の状態にある時には、未來も非常な希望と光明が充ちて居
 る。それで私は現在一念の満足心は過去を美化し、未來を美化し、永
 遠を満足たらしむるものであると信じて居る。而してこの味を
 佛が直心はこれ淨土なりと云ひ、一佛成道して法界を觀見すれば

草木國土悉く皆成佛すと云ひ、又念々に佛と成ると云はれたもの
 である。と考へて居る。(六)(明治三十五年七月)

一念の満足は永遠の満足なり

六。如來の大命

一君等の云ふことや、替くことを見ると、いつでも如來の云はしめ給ふ儘に云ひ、如來の爲さしめ給ふ所を爲し、如來の思はしめ給ふことを思ふと云ひますが、我々に於ては何を云ふのか一向わからぬ、又君等は如來の大命に順ひ、如來の威神力に計らはれて世を送ると云ふが、これも我々には何を云ふのか了解に苦む、全體君等か如來が何とせしむると云ひ、如來の大命と云ふが、其如來の力とか、大命とか云ふことは我々にはわからぬ、それで我々より見ると君等の主義は、近頃やかましく云ふ所の本能満足主義と同じいやうにも見える、之はいかゞなものであらうとは、種々の方面の人々

より御尋ねになる不審であるから、かいつまんで私共の信じて居る點を述べて見たいと思ふ。(一)

一私共は自分の思慮分別を以て、かうしたらよからうか、あいらよからうかと思ひ憚むには及ばぬ、私共の一舉一動は只如來の降し給ふ大命に従ひ、如來の導き給ふ威神力に計らはれて安心に事を處するより外はない、この自分の分別を離るゝと云ふ點より見れば私共の宗教は禁欲主義のやうにも見えやう、又如來の大命の儘にどし／＼やつて行くと云ふ點より見れば本能満足主義のやうにも見えやう、茲に至ると見るものをして見せしめよ、誤解する者をして誤解せしめよである、然しながら私共の宗教は禁欲主義でもなければ、本能満足主義でもない、一言にて言はゞ私共の

宗教は他力主義とても云はるか、又無責任主義とても云はれやう。
(三)

一 私共の宗教を本能満足主義と同じうはないかと云ふ人は云ふ。大體如來の大命なるものは凡夫の知り得る所にあらず、凡夫が如來の大命を知り得ないとすれば彼等は、一方では汝等の云ふ所を聞いて倫理上の責任を重じないと同時に、一方では自分の意思の儘に行ふやうになりはせぬか、かうなると本能満足主義と同じうなりはせぬか、どうだとのことであるが、之は私共に取つては何の痛痒も感じないこととて、私共より見れば、かの本能満足主義の如きは、自己の我意を張ることを教ゆるもので、決して安心の法でないと思ふ。他人はいざ知らず、自分共は本能満足主義では安心が出

來ぬや、はり私共は自分の知、自分の情、自分の意、總て自分と云ふ事を離れて大なる大なる力、即ち如來の大命に従ひまかすより、外に安心の法が見付からないのである。(三)

一 私共の宗教を難する人が、如來の大命を知る事ができぬからと云ふ前提を置いて難するが、私共より見ますれば、又其人々を難するに、君等は如來の大命を知らないからこんな誹難もしたくなるのであると云はなければならぬ。私共は人生の唯一の事業はこの如來の大命を知り得るに至ることである。と信ずる。私共が一度この如來の大命に接し得るの地位に進んだならば、一言一行、一舉手一投足、決してかの重盛が、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと嘆じて自殺するの止むを得ない窮境に

陥るつたやうなことはないに出逢はないのである。如來の大命に従ふ者は如何なる場合に臨むも常に自若たるものである。悠々たるものである。故に私共は總てを抛ちても如來の大命を知り得る迄にならねばならぬ。(四)

一 如來の大命を知る事の出来ない人か、私共の云ふ所を了解しやうと思ふのは洋食を食ふた事のない人か、洋食の味が悪いと云ふと同じ事である。ちと云ひ過ぎかも知れないが、如來の大命を知るを得ない人は到底私共の云ふ所はわかるまい。そのわからぬ所から、私共の宗教をあれか、これか、あれに似て居る、これに似て居ると云ふのは、かの秋山郷の人民が蠟蠟を評定したとよく似た事ではあるまいか。故に私共の云ふ事がわからないと云ふ人には、先づ

第一に、如來の大命を解するに至る迄に達しなさいと勧めるより外はない。何となれば宗教上の總ての問題はこの關門を通らなければ了解する事ができないからである。(五)

一 識り得るときは則ち事々物々の上皆な天然に箇の中にあり。那の上にあると人の安排を待たざるなり。安排着るときは則ち中ならず問ふ時中如何曰く中の字最も識り難し。須く是れ默識心通すべし。と朱子が云ふた。この中の味はひが、今私共の如來の大命に移して味ふ事が出来るであらうと思ふ。一度如來の大命を識り得るに至れば則ち私共の一舉一動に天然に如來の大命が降り來るのである。而して之は私共の方であらうか、かうであらうかと安排するのではない。然らばどうしたら、如來の大命が識り得

るやうになるかと問ふか。さなり、如來の大命は默識心通すべし。ある如來の大命は信仰の眼が開けて凡夫の心が如來の心と融通するに至つて始めて識得することができるのである。(六)

一食はずして腹のふくるゝ法ありやと問ふ者愚ならば、未だ如來を信せず、否信せやうともしない人にして、私共に如來の大命をわかるやうに説明せよと云ふ人はあまり賢なりとも申されない。全體如來の大命なるものは私共のやうな者の言語文字を以て説明すべきものではない。又説明したとて、如來を信じない者にわからう筈がない。(七)

一そんならどうすりやわかるやうになるかと云ひますか。そう、宗教上の信仰は科學や哲學の理窟を考うるやうでは何等の

得る所もない。宗教上の信仰はまじめに之を要求しないものゝ爲めには興へられないのである。宗教上の信仰はなぐさみ半分にならうと思ふてもわからぬものである。古來から宗教上の信仰が神秘であるやうに考へた人があるのは無理ではない。かの蝸牛はあたゝかさ光りに逢ふては殻から身體を顯はすが、小供がなぐさみに彼が身體を出して見やうとしても、中々出て來ない。宗教の信仰も丁度こんなものである。聞いて見やうか位な精神でいくら聞いたとて信仰が得らるゝものではない。批評的に如來の大命がわからぬから説明してくれなどゝ云つたとて、説明もてきないし、又したとてわかる筈がない。(八)

一全體如來の大命なるものは其時其處其人に對して降るもの

であつて豫めこんな形ちで降るとは定められない唯平生の時に信仰の隔門が開かれて如來と默識して居る人には敢てこちらから求めずしてどしどし如來の大命が降り來るのであるかうなると毎日の生活は随分氣樂なものである平和なものである自由なものである満足なものである私共が何が幸だと云ふてもこの如來の大命に従ひ得るに至つたやうな幸なことはないと思ふ(九)

一終りに斷言します如來の大命なるものは批評的に見る間客觀的に眺めて居る間は到底わからない要するにノンセンスに過ぎないされど切實に熱誠に主觀的に信仰的に進み來るならば茲に如來の大命の意義を悟り得て光明の天地が開けるのである(一〇)

一若し夫れ私共の兄弟にしてまじめに如來の大命に従ふの生

活に入りたいたからと私共に相談なさる人があるならば私共は其人に云ふ兄弟よ汝と我と共に心配と苦慮との原因として居る所のこの精神この身體この財産この名譽この妻子總て之等は私共の所有ではない私共は我ものでないものを我もののやうにふるまふから種々の煩悶や苦惱に陥らねはならぬのである故に私共は之等の總ての物はあるやうにあればと思ひ成るやうに成れと思ひその道程には種々ありと雖も世の總ての事はよい方へ進んで居ると信じ自分も何か大なる力に動かされて居ると信じてともかくもあなたまかせの生活をして總ての境遇に満足して勇猛精進しやうではないかかくて如來の攝取と加被力とは自己の精神上の事實となり終には日常の生活に方針ができ基礎が定まり如

來の大命の儘に動止して平和な自由な満足な日を送るに至るのである。兄弟よ、何卒相携へてこの天地の客とならうではないか。何にも六かしい事はないのである。ほんの信ずる一つである。盡十方無碍光如來を信する一つである。慈悲の如來に頼りすがら一つである。兄弟よ、願はくは共にこの關中の好景に清興を樂まうてはありませんか。(二)

(明治三十五年十月)

七。斷乎としたる生活

一。これは支那の昔話である。瓶を負ふて行く人が、其負ふて居る瓶が落ちて破れたのに、後をもふりむかずして、さつさつと行つた。すると其の有様を見て居つた人が、汝は何で後を見ぬのであるかと尋ねたところ、其人の答えか面白い。後をふりかへつて見た所で、破れた瓶が元の通りになることもあるまい、そんな事をするのは無益な事であるからしないのである。(一)

一。これは露國の小説にある話である。イクナット、ゴルチュフが多年の労働の結果、赤手よりして終に、ボルガ河に汽船を浮べるやうになつた。或時この汽船が折悪く燃えた。その燃えて居る時に、ゴルチュ

「は平氣で酒を飲んで居る。そこで其朋友が、汝は自分の大事な瀛船が燃えて居るのに、なぜそんな平氣な顔で酒なんか飲んで居るのかと問ふた。すると彼は男らしく次のやふに答えた。僕が泣いたところが、其の涙で船の火が消えるでもあるまい、それに僕のある間は又瀛船を得る事が出来るからな。」

一この二つの話は實に面白い話ではないか。私は常に話す、而も大なる興味を以て話すところの説話である。道を行く人が、ひよつとしたこと、で轉だとしたまへ、其時に其人か、自分の衣の汚れたのなどを見て泣き叫んで居たらどうであらう。泣いたとて衣の汚れがとれるでもあるまいに、實に始まらない事ではないか。そんな泣いて居る暇に、汚れても拂ふて、さつさと志す所へ行つたらよさを

うなものだ。私は破れた茶碗をつぎ合せてうらめしそうに見て居るのは、實に恐な事である。つまりぬ事であると思ふ。之と同じく、自分のやり損ひをした事を、いつまでもくよくよ思ふたり、自分の今日の境遇に彼此恐痴をこぼすほど憐な人はないと思ふ。(三)

一世の中には往々高利貸から金を借つてをいて、返濟期になつて、債主からひどく責められ、差押でもくはうものなら、奴はひどい奴ぢやなど、云ふて、怒つたりこぼしたりして居る人がある。私はこんな人を見ると氣の毒でたまらぬ。虎の檻の中へ手を入れて虎に手をかまれたと云ふて泣いて居る人が、賢い人と云ふべくば、或は高利貸の無法を怒る人も賢いかも知れない。が、私はこんなことは嫌ひである。高利貸が悪い奴ぢやと思ふたら始めから、そんなもの

のに相手にならぬがよいではないか、既に悪い奴ぢやと承知の上で取引をしたのなら、ひどい目に逢はされた所が怨む譯もないではないか、ひどい目に逢ふのが厭だつたら借りない方がよいではないか。(四)

一損するが厭な位なら始めから商業に手出しをせぬがよいではないか、溺るゝが厭な位なら始めから船に乗らぬがよいではないか、死ぬのや病むのが厭だつたら始めから人間に生れないがよいではないか、子を持つのが厭だつたら始めから妻を持たぬがよいではないか。(五)

一我は自ら好んで人間に生れたのではないと云ふか、そんなら病氣や死亡も、自分の意志でどうすることもできないと云ふ事に

就ても豫め覺悟して置かねばならぬ。(六)

一私の姉の死んだ當座の事である。私の父が某家に行かれると、その主婦が、今度はかわゆい事をなさいましたと云ふた。其に答えられた父の言葉がなか／＼面白い。可愛い事は可愛い。然しこの可愛い思いをせまいと思ふたら、私は石を子に持つたら死ぬ事がなくてよかつた。うとは父の答であつたと、此頃其の主婦が私に話してくれた。私は實にありがたい話だと感じた。(七)

一雨の降る日もあれば、天氣のよい日もある。花の咲く時もある。ば、散る時もある。得することもあれば、損する事もある。雨の降るのも當前である。天氣のよいのも當前である。花が咲くのも當前である。散るのも當前である。戦争に勝つのも當前である。敗けるのも

當前である得するのも當前損するのも當前である弱けりや敗けるべきなきや落第するそれが何であるか(八)

一 大丈夫志を立て、世に處す、須らく、些々たる事に心を動かさず、だめな事にくよくよして居ないやうにしたいものではあるまいか(九)

一 厭なら止める好きならやる好きでやるならどしどしやる天下を敵としてもやつつける厭て止めるなら誰が何と云はうが自分の名譽がなくなろうが食へなくなろうがかまはず斷乎として止める之が男子らしい行爲ではなからうか(一〇)

一 厭とは思ふが、然しやらねばならぬと思ふたなら、斷然やるべし、不平を云はずにやるべし、不平を云ふ位なら始めからやらぬが

よ、我等は出處進退を満足してやつて行かねばならぬ、満足は力である、力は成功である、事を爲すにも、事を爲さぬにも、厭々ながらやる、世間につけてやる、妻子に引かれてやると云ふやうな事のないやうにせねばならぬ(一一)

一 それかくの如く男らしく明白な斷乎たる生活をするには、精神の根本に於て、確乎たる信念、即ち火に焼けざる、水に溺れざる、堅い信念の基礎がなくてはならぬ、我等が事に當つて躊躇して迷ふのは自力の妄念が我等の心の月を覆ふて居るからである、故に我等はこの自力の妄念の雲を拂ひのけて、絶對他力の靈能に身心を歸托して、何事も如來の大命の儘に、やつて行つたならば、はつきりすつかり、晴天のやうな生活が、自然と出来るやうになれるのである

る。此の世に於てすつかりと云ふまでには行かずとも夫に近い生活がてきるやうになる。これはこちらから求めるのでなくて、如來から賜はる、利益である。(二三)

(明治三十六年五月)

八。彼の物は彼に、我の物は我に

一よこすかよこさないかは向の勝手である。その代りに夫を受け受けるか受けないかは此方の氣儘である。いくら人が、此方へよこさうとしたところで、此方で貰ふて益のないもの、否害のあるものならば、何にも是非に貰はねばならぬといふことはない。よこすよこさぬは向の権利に屬し、貰ふ貰はぬは、こちらの権利に屬する。貰ふが満足なら貰ふがよい、貰ふが不満足であるならば貰はぬがよい。(一)

一。ところが、日常私共の思ふたり、爲したりすることをみると、そうばかりやつて居らぬやうである。唯抽象的によこすよこさぬは向の権利、貰ふ貰はぬはこちらの権利、貰ふて満足なら貰ひ、貰ふて

彼の物は彼に、我の物は我に

不満足なら貰はぬがよいと考へて見ると、成程夫は御尤もであると思はるゝが、實際の場合に至るとこの明白なる道理に迷ふて、悲んだり、悶わたり、煩ふたり、怨んだり、怒つたり、泣いたりするのである。而して、夫に氣付かないのであるから淺間しい。(三)

一、害をよこすか、よこさぬかは、人が私に對して有する權利である。又益を興ふるか興へないかも、人が私に對して有する權利である。私共は、人が此方に害毒を興へたからと云ふて怒るにも及ばない。又人が此方に利益を興へないからといふて怨むにも當らない。人がいくら私に毒藥を興へたところで、私がそれを貰ひさへしなけりやよい。よし貰ふたとしたところで、夫を飲みさへしなけりや、聊も害を受けない。之と同じく、いくら人が此方に害毒を興へたと

ころで、私共はそれを受けさへしなけりやよいのである。(三)

一、水は物を濡す働きを有するものであるといふことは云はれる。然し總ての物は水に濡さるゝとは云はれぬ。普通の紙は水に濡れるが、油紙は水に濡らされないではないか。(四)

一、人が私共に對して、害毒を興へたとか、利益を興へぬとか云ふことは、私共に、憤怒又は怨恨等の惡感情を興うるものであるといふことができる。然し人がいくら害を興へたところが、益を興へないところが、必らず私共が怒らねばならぬ、怨まねばならぬといふやうなことはない。決してない。(五)

一、モルヒネは私を殺す毒である。然し夫を飲まねば何てもない。人が害を興へることや、益を興へないことは、私共に憤怒や怨恨を

與へるものであるかも知れない然し私共が向が與うる害毒を受
けさへしなけりや怒る必要もなく怨む必要もない(六)

一打つが打たぬかは向に屬する力である打たれて怒るか怒らぬかは此方に屬する力である尊敬するか輕蔑するかは他人に屬する力である輕蔑せられて怨むか怨まないかは私に屬する力である濡らす働は水に屬する力であるが之に濡れぬか油紙の有する力であることは私共が大に味ふべき教訓ではないか(七)

一他人に屬することは他人の爲すまいにして置くがよいその代り自分に屬することは自分の儘にせねばならぬそれなのに私共はともすると他人に屬する事物を自分であしやうのこらしやうのと思ふて苦みながら自分の有する力自分に自由にてきる

働きを用ゐないて居る事があるやうであるこれは大に考へて見ねばならぬことである他人が私共の思ふ儘に手の上げ下げをしないといふて怒つたり怨んだりしながら自分自身の手を上下するの力を用ゐないのは愚てはないか害毒を與へるか與へぬかは他人に屬する力である尊敬するか輕蔑するかも他人に屬する力であるその代りそれについて怒るか怒らぬか苦むか苦まないかは此方が有する力である(八)

一他人のものは他人に返せ自分のものは自分で用ゐよ之は私共か常に忘れてはならぬ教訓である(九)

一人か劍を以て自分を害するならばどうして怒らぬて居られやうとは常人の思ふところである然しイエスキリスは十字架の

上て、彼を害する人民の爲に神に祈つたてはないか。人が毒を以て自分を殺さうとしたならば、どうして悲まぬに居られやうとは常人の思ふ所である。然しソクラテスは自分を毒殺するギリシヤ人を怨まなんだではないか。私共はキリストたらん、ソクラテスたらんと志さねばならぬ。昔釋尊が修行して居られた時に、惡魔は世尊を害しやうとして、毒矢を雨の如く放つたところが、この矢が皆釋尊の心には花瓣の如く感ぜられたといふことである。この話は大に味ふべき事ではあるまいか。(一)

一、エビクテタスが信する所のゼウス神より受けた告命は次の如くであつた。

一、エビクテタスよ、出来ることであつたならば、予は汝の小さい

身體と小さい性質とを自由にし、拘束せしめずに置きたいのである。然しよく考へて見よ、この身體は汝のものではないぞ。それはたゞうつくしく目鼻つけられた土塊に過ぎないぞ。予は汝の爲に身體及性質を自由にしてやることができなかつたから、予輩の一小部分を汝に與へた。即ち夫は、物を求め又は避ける能力、即ち好み又は嫌ふ能力、一言にて云へば、事物に就ての感銘を用うる能力である。故に汝はよく考へて、この能力か自分のものであるといふことを自覺したならば、決して拘束せらるゝこともなく、障害物にも出逢はないであらう。かくて、汝には憂苦もなからう、耻辱もなからう、他人に媚ぶることもなからう。(二)

一、エビクテタスの自信によると、人間が有する唯一の力は、人が

ら打たれない事でもない貧乏でない事でもない病まない事でもない而して人から打たれて怒り又は怒らぬこと、輕蔑せられて怨み又は怨まぬこと、貧乏して悲み又は悲まぬこと、病んで苦み又は苦まぬこと、之等の力は私共の有する唯一の能力であるこの力を用ゐて行つたならば憂苦もなく耻辱もなく阿諛もなくなるとはエビクタスの信する所であつた而して之は二千年以後の今日

でも私共が大に習はねばならぬ考であると思ふ(二二)
 一怒りは人の與うるものではない自ら造るのである怨みは人の與ふるものではない自ら造るのである悲みは人が與ふるものではない自ら造るものである苦みは人の與ふるものではない自ら造るものである地獄は佛が造つたのではない自分が造るのである故に怒つたり怨んだり悲しんだり苦しんだりする人は、自らの業報で地獄に落ちるのである(二三)

一雨がふるといふが何でも無い一の事實である然るに或人は之を喜び或人は之を悲む悲む者は幸であらうか喜ぶ者が幸であらうか私共は自分でどうすることのできぬ事に彼此氣をもんで居る暇に自分に有する能力即ち事物に對する主觀の決定に注意しなければならぬ(二四)

一怒るが満足なら怒るもよい泣くが満足から泣くもよい怒るは汝の有する力であるからである泣くが汝の有する力であるからである然し他人がどうしたからといふて自分は厭々ながら怒らざるを得ないと云ふのは自分の持つて居る手を動かさないで

人の手の働らひてくれないのに氣をもんで居ると同じい事である。之は自分の寶を捨て、人の寶を羨むやうて愚な事である。怨むのも、悲むのも、苦むのも、之と同じである。之等は皆、自ら撰んで、怨むのである。悲むのである。苦むのである。故に悲むも、苦むも、怒るも、怨むも、總て他人が悪いのではなくて、自分が自分の有する能力を用ゐないからである。と懺悔せねばならぬ。(二五)

一、釋尊は如來の御心に通した信者の外界の事物に拘束せられない邊よりして、之を泥にあつて泥にそまざる蓮華のやうである。と譬へられたのは、私共の大に味ふべき事ではないか。(二六)

一、私がかやうに云ふて來ると、大抵の人は云ふ、それは成程そうではあるが、中々そうはできぬものであると、怒るは自分の悪いの

てであると知りつゝ、怒り、怨むのは自分の悪いのであると知りつゝ、怨み、自ら苦み、自ら悲むのか自分等の境涯であるから仕方がないとは常人の云ふ事であり、私共にも、この感がないでもない。(二七)

一、然し、怒るのも自分が悪い、怨むのも自分が悪いとまてに氣が付いたのは、已に道にはいつて居るのである。怒り且つ怨みて、自分に道理をつけて居る人から見ると、大に之等は進んだ人と申さねばならぬ。(二八)

一、然し私共は、悪いと知つた丈けて止まつてはならぬ。悪いと知つたら、なるべく、その悪い事から遠ざかるやうにせなければならぬ。(二九)

一、私共は道を知らなけりや、夫迄の事だが、知つた已上は、少しつ

しても之に近ついて行きたいではないか。エビクテタスは云ふた
 「私は決して子ロのやうな大力士となれぬからといふて、この身軀
 をなをざりにもせぬ。又私はクリサスのやうな財産家となれぬか
 らといふて、財産を蔑あつしちにもせない。要するに私共は最上級に達せら
 れないと知つたからといふて決して物を求むる心を捨てゝはな
 らない。一生怒らぬことができぬかも知れぬ。一生苦まぬ事ができ
 ぬかも知れぬ。然し私共は失望してはならぬ。(三〇)

一慈悲の佛陀の導きで必ず完全の域に達せらるゝと信じて
 氣がついたならば、一邊でも怒らぬやう、怨まぬやう、悲まぬやう、苦
 まぬやうにせなければならぬ。(三一)

一其については、私共は常に、他の物は他に返し、自分の物は自分

で用ゐるといふ事を忘れてはならぬ。私共は外界が興ふる事物は
 外界に返し、決して之に依つて主觀の心情を亂されぬやうに心
 がけたいと思ふ。(三二)

(明治三十六年四月)

九。同情を求むるは煩悶の元也

一平素身軀の強壯の時や志した事業がどしく其的まことにあたつて行く時は、親、兄弟、妻子、朋友に對して、別にかうして貰ひたいの、あゝして貰ひたいのと云ふ、他人に同情を求むる心が起きない。従つてかうもしてくれそうなるものを、一向に取り合つてくれないとか、親、甲斐もないとか、兄弟、甲斐もないとか、妻子、甲斐もないとか、明友、甲斐もないとか、云ふて人を怨む事もしない。ところが一度身軀が弱くなるか、事業が志の通りに運ばぬやうになると、いろ／＼と工夫をして、少しても手がかりのある人に同情を求むるやうになる。従つて皆が薄情である。取り合つてくれないなど、云ふて、怨み、怒

るやうになる。之は誰でもかうなるので、平素よかつた人が、病氣になると氣難きづかしい人になり、若い時は人好きのした人が、老いて氣難きづかしい人になるのも、之で、諺に貧すりや鈍すると云ふこともこの道理から來た事である。(二)

一自分が思ふ儘にならぬから困る。困るから人に同情を求むるところが、其同情を求めらるゝ其人も、實のところ自分で思ふ儘にならぬのであるからして、求められたほどに同情を施すことが、さぬ。それで求めた者は、同情が得られぬと云ふて、怨み、又は怒つて困り、求められた者は、怨まれ、怒られて困ると同時に、自分の儘にならぬことが、あぢきなくなつて困つてしまふ。かう云ふぐわいて、兩方共に困り、さるのが、社會の常態であるらしい。(三)

一 私も實は、此頃身體があまりすぐれぬので、求むべからざる同情を求め過ぎ、思ふやうに其の同情が得られぬと感じて、心をむしやくしやさせ、怨んだり、怒つたりして、時には大に厭世的に沈みこむ事がある。ところがよくよく考へて見れば、之は大につまらぬ事である。愚な事である。(三)

一 自分の身體のわるいのは自分の業報である。自分ながらどうする事もできぬ業報である。然るを之を他人にどうかしてもらふとするのは大なるまちがひではなからうか。(四)

一 私共は、親兄弟妻子朋友に對して多大の同情親切を求むべきではない。大體親切だとか、同情だとか云ふものは、こちらが要求すべき性質のものでなくて、向から好意的に與ふるものである。故に

私共は同情が少ないと云ふて怒つたり怨んだりするのは、物のよしやうか足らぬといふて乞食が立腹すると等しい事をやつて居るのである。(四)

一 之を自分が同情を求めらるゝ場合で考へて見ると、親兄弟妻子朋友の間がらでも、なか／＼思ふほどに親切が盡されぬのである。盡そうと思ふ心があつても、自分といふものが自分の儘にならぬ私共の事だから、同情の表示も思ふ存分にできないできないので困つて居るところへ、怒られたり、怨まれたり、せられた日にや、實にたつ瀬がないやうになる。之を思ふ時には私共は親兄弟妻子朋友が、同情の表しやうが我が意に満たないといふて、怒つたり、怨んだりしてはならぬ。(六)

一 自を以て、他を計ると云ふ事がある。己をつめつて、人の痛さを
知れといふ事がある。之は深く味はねばならぬ言葉である。私は
自分の病氣をどうする事もできぬ。その自分でどうする事もでき
ぬ。私は人である。人たる私がかうだから、親もかうにちがひない。兄
弟もかうにちがひない。妻子も朋友もかうにちがひない。だから彼
等も私の病氣に同情心があるにしても、どうしてくれる事もでき
ぬのがあたりまへである。故に私共は成るべく、之等の事を考へて
反抗的態度を取らぬやうに注意せねばならぬ。(七)

一 病氣にてもなるか、失敗でもすると、世間が狭くなるのは私の
経験する所である。之は自然の道理でもあらうが、私共はなるべく
この弊に陥らぬやうに心がけねばならぬ。この世が狭くなるのは、

かうである。(八)

一 誰も自分の事をかまつてくれない、自分をおるか、なまかに取
り扱ふて居る。邪魔者にして居るといふやうに、威ずる者だから、穴
へでもはいりたないやうな氣持ちになる事があるのである。ところ
が翻つて考へて見れば、之は自分の僻み根性から、かやうに思ふの
である。つまり自我心が強うすぎるからである。(九)

一 自分は病人で別に仕事もできないから、専門に自分の病氣の
事のみを考へ、自分の身體のみを考へて居られるか、親でも兄
弟でも妻子でも朋友でも、皆夫々の任務を持つて居るものだから、
病人自身が考へるほど、病人の事を考へて居る暇がないよし考へ
たところでの考への總てを實行して、病人に見せるわけには行

かぬを思はずして怒つたり悲んだりするのは愚な事である私共はつとめてかいる愚な事に心を煩はさぬやうに心がけねばならぬ(十)

一私共は自分のつまらないものであり思ふ儘にできぬものであると云ふ事が感ぜられたり之を人によりて慰められやうとするのはまちがつて居る人もやはり自分の通りにとでもたよりにならぬものであると云ふ事を覺悟して居らねばならぬやうして行くに煩惱が少くなるやうに思ふ(二二)

一私を中心にして佛の慈悲といふ事を感し佛の力をたよとしてこの淋しい天地同情のない天地に歡喜と感謝とを以て生活する事ができるのを喜ぶのである(二三)

(明治三十六年九月)

一〇。他の罪を數うるは自の罪を

滅する道にあらず

一自分が過失でもあつたとか悪いことでもした時に、他人が其罪を責めると、何彼だとしてあんな過失もある、こんな罪惡もある、彼のやうなものが、我が過失や罪惡を責めたとして我は何等の痛痒も感ぜぬ。全體彼は我の過失を數へる權利がないのである。云ふか、云はぬかの違ひこそあれ、誰でもこんなぐわいに考へる事があるのである(一)

一私は今諸君と共に、この考へはこの儘に成長さすべきものであらうかどうにか修養すべきものであるかと云ふことを研究し

他の罪を數うるは自の罪を滅する道にあらず

て見たいと思ふ(三)

一比較的過失の妙ない人もあり罪の薄い人はあるが聊も過失がなく罪のない人と云ふものはないこの點から見ればどんな人でも他人の過失を責める権利はないのである自分が放蕩無頼で居ながら子供の放蕩を誡めたとてなか／＼聞くものではない自分で過失がありながら人の過失を彼此云ふたところで仕方がないのであるであるから私共は他の過失を見罪惡を見たらば人のふり見て我がふりなほせて自分が其に類する過失がないかどうかと云ふことを願みて若し之があつたら夫をなくするやうに心懸けねばならぬ(三)

一然し之ばかりではすまぬ過失と云ふものは人が自覺して居

らぬとだん／＼多きくなるものだから朋友などの過失は随分云ふてきかせねばならぬ責めるのは善くはないが云ふてきかして過失を自覺せしむるやうにするのは親切なことである自分の顔について居る墨が見へないやうに自分の過失は他人から云ふてもらはねばなか／＼わからないのであるから私共修養に心かゝる者は自分の過失を人から聞くのを冀ふやうにしてさいた過失はせつせと改めて行かねばならぬのである而して自分でも他人の過失に氣が付いたら云ふてやらねばならぬ人の顔に墨が付いて居るのを腹で笑ひながら夫を本人に云ふてやらないのは不親切の至りであるこの點から云へは人の過失を過失だとして云ふてやると云ふことは親切がなければさぬことである親しい

間でこそいろく悪い點も忠告するが通りかゝりの人に對しては顔に墨が付いて居るとも知らしてもやらないのは常ではないか。故に私共は、朋友又は師兄より、自分の過失を云ふてもらふのを怒つてはならぬ。のみならず其親切を幾重にも謝せねばならぬ。然し自分が朋友の過失を知らいてやるのに親切からであると云ふやうな顔をするのは面白くない。(四)

一私共は、やいもすると人の過失や罪惡を數へることによつて、自分の過失や罪惡がなくなるやうに感ずることがある。之は大にまちがつた考へである。自分の不注意で陶器を破はした時に父兄から不注意を誡めらるゝと、何父兄だとして陶器を破はすことがあるてはないか。過失は我ばかりにあるてはなしと云ふて、一向自分

の過失を改めるやうにする氣のない人がある。又賭博をやつて捕へられた者が、何我ばかり賭博をやつてなし、立派な大臣や紳士でもやるてはないかと云ふ様に意張つて居るのがある。盜賊が人の物を盗みながら、何我ばかりが盗むてはなし、國家も戦争といふ大きな盜みをするてはないか。政事家や商人も我よりも大な盜みをするてはないか。と意張つて居るのがある。放蕩息子が、自分の放蕩を悪い事と思はないて、何家の亭主でさへやつて居るてはないか。學校の先生でさへやつて居るてはないか。と意張つて居るのもある。私共はこんな大ざつぱには思はないか。も知れぬが、之に類する思ひぶりをすることが折々あるから、道友諸君御互に氣を付けやうじやないか。(五)

一、自分の罪は自分の罪である。自分の過失は自分の過失である。この自分の罪や過失は、他の罪や過失を數へたところてなくなる。と云ふ事は、ない。自分の顔に付いた墨は、他の顔に付いて居る墨のことを云ふこととて、決して、洗はるゝものではない。夫て自分の顔の墨を人が云ふてくれたら、あなたも付いて居ると云ふもよいが、夫と同時にまづ自分の墨を洗はねばならぬ。國家が盗みをし、立派な顔した商人が盗みをして居るとすれば、國家が悪いのである。商人が悪いのである。夫と同時に、國家が盗みするからと云ふたその盗人も悪いのである。賭博の悪いことは、大臣がするから善いと云ふことはない。捕へられた人が賭博をして悪いことは、大臣がするから悪くないと云ふことはない。先生が放蕩するのは、先生が悪

いのである。先生が放蕩するからと云ふて、學生が放蕩したならば、學生も亦善いのではない。故に、私共は、平常人から、自分の罪や過失を責められた時に、何汝も、そうではないかと云ふて、自分を罪人仲間過失仲間へ、急ぎ入れないで、人は、兎も角、自分は、そんな罪や過失があつては、ならぬと、自ら氣をつけて、急走急作して、之を改むるやうにせねばならぬ。(六)

一、他の罪を數うるのは、決して、自分の罪を滅する所以ではない。自分の罪は、深く、自己省察をして、其罪を懺悔し、小罪をも、宇宙大の罪の如く、感じ、嚴格に、自己を責め、沈着に、之が解脱を考へ、茲に、信仰の門に入るの機を得て、始めて、他力攝取の如來の慈悲が、味はれるやうになるのである。(七)

一。正のきりくすの足の取れたのに泣いたガリバルジは
 以太利國を興したてはないか、小罪を願みぬと云ふやうな根性、自
 分の罪を棚へあげて人の罪を数うるやうな根性ではとても、宇宙
 の大靈の救ひの御手にすがると云ふ、大快事が爲しとげられまい
 と思ふ故に、私は道友諸君がこの些細な心つかいの間に大なる靈
 光を認めらるゝやうになつたならばうれしい事であると思ふ。

(明治三十六年十月)

一一。馬鹿にせられたりとして怒る
 者は馬鹿也

一。私共は折々、某が我を馬鹿にしをつた、失敬な奴だと怒ること
 がある。ところがよくよく案じ見ればこれは反りて、自ら馬鹿にな
 ることである。なぜかと云ふに、人がいくら之は黄銅である、銅であ
 ると云ふたところで、金は金である、金の金たることは、人が黄銅と
 云ひ銅と云ふことに依りて變ずるものではない。(一)
 一。自分が賢いものであつたならいかほど人が馬鹿だと云はう
 が馬鹿だと思はうが、夫に依つて賢いものが愚になると云ふこと
 がある筈ではない。夫だのに、人が己を馬鹿にしをつたと云ふて怒

るのは外物他物に支配せられてあつたら自分の價值を棄て、しまうのではあるまいか人が自分を馬鹿として買はうとしたならば馬鹿の値段で賣るつもりならそれでもよからうが荷も之を好まなかつたら心を落付けて人が馬鹿だと云はうが恐と云はうが自分は自分であると高くとまつて此等に頓着せず虚心平氣になつて居るやうでなければならぬ(三)

一人がいかほど自分を馬鹿にしたところで自分さへ馬鹿にならなければよいではないか自分さへ確かりして外物他物の爲めに動かされないやうになつて居れば人がいかほど馬鹿にしやうとしたところで馬鹿にせらるゝものではない然るに人が自分を馬鹿にした失敬な奴だと怒るやうではつまり外物他物の爲めに

動かされたのであつて自ら馬鹿の列にはいるのである(三)

一人の眞の價值と云ふものは世の中の人の評判や何かで左右せらるゝものではない世の人がいくら破戒坊主だと誇つたとて親鸞聖人は親鸞聖人である世の人がいくら山師僧だと嘲つたとて日蓮聖人は日蓮聖人である人が破戒僧だと誇つた事で親鸞聖人の價值は滅せぬ人が山師僧と嘲つた事で日蓮聖人の價值は滅せぬ人が黄銅と云はうが銅と云はうが金は金である人が馬鹿だと云ふたとて賢が恐となりもせず人が賢と云ふたとて恐が賢ともならぬ故に人の爲めに馬鹿にせられたなどい心動かすなどはいかにもくまづいつまらぬ事である(四)

一 尙ほ進んで云へば私共が人より馬鹿にせられたと云ふて怒

るの。は。實に。憍慢心の。骨頂である。自分が賢いもの。だ。豪らいもの。だ。敬せらるべきもの。だ。と思へばこそ。馬鹿にしをつた。失敬な奴。だ。などい怒るのである。之が大體間違て居るのではないか。自分が賢いもの。だ。と思ふほど。恐なことはない。自分は豪いもの。だ。と思ふほど。つまりぬ事はない。自分が敬せらるべきもの。だ。と思ふほど。卑しむべき事はない。向上の。一路をたどり。進歩の。道程に進む者は。常に自分。は。恐なもの。つまりぬもの。卑しいものと云ふ。謙遜の。精神がなければならぬ。この謙遜の。精神が缺けて居るからして。憍慢心の。角が生へて。一寸した事に。人が馬鹿にしたとか。失敬だとか云ふて怒るのである。自分がどれほど賢いと思ふて居るのか。どれほど敬せらるべきであると思ふて居るのか。自分の。價值を高く買ひ過ぎる人。

否、自分の。價值を人に高く値ぶみしてもらいたい人は。憐むべき人ではないか。こんな精神の人だからして。人が馬鹿にするのも當然である。こんな精神の人だからして。人が敬せぬのも當然である。(五)

一。故に。私共が。人より馬鹿視せられた時には。大に。痛み入つて。内に。省み。大に。警戒を加へて。靜かに。向上の。一路に進まねばならぬ。私共は。人より馬鹿視せられた時や。輕蔑せられた時には。徒らに。之に怒らずして。之を。好機として。精神の。修養をして。今日。馬鹿視した人をして。他日。今日の。彼の。舉動を。耻づる。までに。自分の。中心の。光明を。磨かんと。心かけねばならぬ。失敬なと思ふた事があつても。決して。之に。怒らずして。今日は。自分の。徳が。足らぬ。から。かやうに。卑しめらるゝが。他日。大に。徳を。積んで。彼が。今日の。失敬を。悔うる。やうになる。

ま○で○自○己○の○徳○を○修○養○せ○ん○と○心○か○け○ね○ば○な○ら○ぬ○(六)

一 美貌を自慢にする人が、自分の美貌を賞めてくれないと云ふて盲人を怒つたならばどうであらうか。小判が自分を大事にしてくれないと云ふて猫に怒つたところて始まらないではないか。ヘブライ人はキリストを馬鹿にしたてはないか。提婆は釋尊を馬鹿にしたてはないか。金の人が徳の人を馬鹿にし、徳の人が金ろ人を馬鹿にするのが普通ではないか。故に私共は自分を馬鹿視したからと云ふて怒るのは實につまらない事である。(七)

一 實力ある人であつたなら、人が馬鹿視したら、こう思ふて平氣で居るであらう。馬鹿のする事を見て居るがよい。今にびつくりするであらうと實力ある者は、人より卑しめられた時に、卑しい者の

する事を見るがよいと云ふ風に落付けて行くことかできるの
ある。大人物となるには馬鹿のする事を見て居よ。卑しいものいす
る事を見て居よと云ふ積りではなくてはならぬ。凡そ事を爲すには
馬鹿と云はれやうが、卑しめられやうが、そんな事には頓着なく、一
向専念に志した事に進まねばならぬ。若し人の馬鹿だと云ふ事や、
卑しむる事に心を動かして居つたならば、徒らに精神を勞して、爲
すべき事業を爲すの勢力を減ぜらるゝと云ふものである。故に私
共は一向専念に事に従はねばならぬ。之は何事を爲すにもそうて
ある。(八)

一 別して信仰問題などに心がくる人はこの決心がなくてはな
らぬ。人が恐と云はうが、迷信と云はうが、かまはないで、愚の安心を

見よ、迷信の歡喜を味はずやと云ふ風に落付いて居なくてはならぬのである。(九)

一 要するに、私共は人に馬鹿にせられたと云ふて怒るのは自ら馬鹿になる事であるから、かくならぬやうに常に注意しなければならぬ。(一〇)

(明治三十六年十一月)

一一。 勝 敗

一 敗けるならば男らしく敗けるのが面白いではないか。勝つならば男らしく勝つのが面白いではないか。敗けるの勝つのと云ふことは自分の力量と外界の境遇とによるのであるから、敗けるのは止を得ずして敗けるのであるし、勝つのも止を得ず勝つのであるから、敗けたと云ふてめそ／＼泣いて居る事もなければ、勝つたと云ふて鼻をへこつかす理由がないではないか。(一)

一 自分の力量が足りなくて敗けたと云ふか、それはあたりまへのことである。自分の力量が多くして勝つたと云ふか、それもあたりまへのことである。何にも力量の少ない者が敗けたと云ふて今更

のやうに泣き悲しむにも及ばぬことであるし、力量の多い者が勝つたからと云ふてえらさふにするにも及ばぬことである。(三)

一 子供と角力取と角力を取つて、子供が敗けるのがあたりまへで、角力取が勝つのがあたりまへである。子供が角力取に敗けたからと云ふて残念がつたり、悔しがつたり、悲しがつたりした所が、はじまらぬ話ではないか。是と同じく角力取が子供に勝つたからと云ふて、踊つたりはねたりして喜ぶのも、はじまらない話ではないか。角力取はきついでから勝つ子供は弱いから敗ける。それがなにか。敗ける者は敗けざるべからずして敗け勝つ者は勝たざるべからずして勝つ敗ける者も天下の大道理に従つて敗けるのである。から、男らしく此大道理に従つて愉快にして、愉快に敗けて行くのがよい。勝つ

の○も○天○下○の○大○道○理○に○従○つ○て○勝○つ○の○で○あ○る○か○ら○男○ら○し○く○此○大○道○理○に○服○従○し○て○愉○快○に○し○て○然○も○謙○遜○に○し○て○勝○つ○て○行○く○の○が○よ○い○で○は○な○い○か○(四)

一 外界の境遇が悪かつたが爲に、自分の力が充分ありながら、力のない者に敗けることがある。是に反して外界の境遇が善かつた爲に、自分の力量が少なふて力の多い者にかつこともある。其の敗けると勝つと共にやはり止を得ざる天下の道理に支配されて勝ち又敗けるのであるから、敗けたと云ふて涙をこぼすにも及ばねば、勝つたと云ふて鼻を動すにも及ばない理である。自分の力量は多かつたけれども外界の境遇が悪かつたが爲めに敗けたと思ふ人は、次の様に思ふて心を落ち付けて居らねばならぬ。自分の力量

は敵の力量よりは多かつた。然し敵の境遇は自分の境遇よりも善かつた。力量も自分の力量、境遇も自分の境遇、然して見れば、自分の善い者が敵の善い者とは少なかつたが爲に、敗けたのである。故に敗けるのは別に珍らしいことではない。敗けるのはあたりまへである。火が熱くて、氷が冷たいのがあたりまへであるやうにあたりまへてある。火が熱いからと云ふて泣いて居る者があつたらどうか。氷が冷たいからと云ふて悲しんで居る者があつたらどうか。諸君は恐らくは其愚なるを笑ふてあらう。然も其愚を笑ふ諸君にして、それとねなじやうな愚なことを悲しんだり、苦しんだり、怨んだり、なげいたりして居りはせぬか。(五)

一世間には往々自分は善かつたのだけれども外界の境遇が悪

るかつたので、敗をとつたのは残念だからと云ふて、人を怨んだり、身をはかなむたり、神佛を疑ふたりする人がある。是は丁度氷が冷めたいからと云ふてなげき、火が熱いからと云ふて怨むと同じこととて馬鹿くしいことである。世間の随分賢い人で馬鹿くしいことを氣を付かんでやつて居るやうである。大いに氣を付けてもらはねばならぬ。(六)

一畢竟敗けるも勝つも大なる靈なる力に支配されて居るのであるから、敗けても勝つても悲しみもせねば、ほこりもしないで、平氣の平左でどしどしやつて行くがよい。(八)

一敗けるならば男らしく敗けるがよい。勝つなら男らしく勝つがよい。敗けた時に敵に敗けたと思へば残念でもあらうが、宇宙の

眞理を明かにしたと思へば愉快でないか勝つた時にも自分が敵に勝つたと思へば自慢氣も出やうが宇宙の眞理に支配されて居ると思へば謙遜にして居れる譯ではないか何にしても敗けるにも勝つにも男らしくはつきりして不平やなんかのないのか面白いではないか(九)

(明治三十六年六月)

一三。人の自分の同情を受けざるを煩ふ勿れ

一私が之ほどまでに思ふて居るのに、彼はそれをそれ共思ふてくれぬとは多くの人の云ふ言である。私が之ほど彼の爲めをしてやつて居るのに、彼は一向私に感謝の意を表してくれぬとは私共か折々胸に起る不平である。(二)

一私は嘗て、人に同情を求むるは煩悶の元であると云ふことを感じもし、書きもしましたが、此頃に至りて、人に同情を受けて貰はうと云ふも亦煩悶の元であると云ふことを感じました。(三)

一同情を求むるの煩悶も至極親しい間柄に起る煩悶であるが

人の自分の同情を受けざるを煩ふ勿れ

今この同情を受けてくれぬと云ふ煩悶も又親兄弟妻子朋友と云ふ様な至極親しい間柄にて起る煩悶であるこの同情を受けてくれぬ自分が之ほど迄に思ふて居るにそれをそれとも思はぬと云ふのは同情を受けてくれる事を求めて而して之を得ざるが爲めに起る煩悶であるつまり之も八苦の中ては求不得苦の一である(三)

一全体私共は親兄弟妻子朋友に對して求むる事が多う過ぎるのである親しさのあまり彼等を自分の思ふやうにあらせたいと思ふのが第一の間違であるエピクタスが云ふたやうに妻子朋友は自己に屬する者ではないと云ふ事が明らかになつて居るか佛法に教うるが如く煩惱具足の凡夫火宅無常の世界よるづの事皆以てそらことたわことまことあることなきを信じて居れば決

してかやうな煩悶が起きない筈である(四)

一愛する愛せぬは此方の力に屬することである然し之を受けるか受けぬかは彼方に屬する力である同情するは此方の力である然し之を受けぬは彼方の力である愛する者は此方に愛するを以て満足せねばならぬ其以上に彼方に愛を受けるを望み之を受けぬとて怒り怨み又は苦むのは人情ではあるけれども大に間違つた事である同情する者は此方に同情するのみを以て満足せねばならぬ其以上に彼方に其報酬を求むるを望み之が得られないと云ふて怒り怨み又は悲むのは恐なことである(五)

一全体私共の煩悶するのは求むる事が多いからである金を求めぬ者が金に苦むと云ふことはない位を求めぬ者が位に苦むと

云ふことはない、學問を求めない者が、學問の爲めに苦むと云ふこととはない、同情を求むるが故に同情に苦み同情の同情を求むるが故に又之が爲に苦むのである。シヨベンハウエルが意志の表現として世界を論じたが、私は欲求の對象としての世界は多苦也、欲求なき生活は涅槃也との佛陀の教訓を今更練り返さねばならぬ。(六)

一世の中を渡るには軽く渡らねばならぬ、執着があるて欲求心も起るのである、執着がなくなれば欲求心も少なくなり、従ひて煩悶も苦痛もなくなるのである。親子兄弟夫婦朋友の間にありて、同情を受けてくれぬと云ふて苦むのはつまり執着が過ぎるのである、彼等を軽く見るやうになれば何も彼等から同情の御禮を受けないでもよい譯である。(七)

一又私共が人を愛し又は人に同情を表して、人が之を受けてくれぬと云ふて苦む前に、自分の愛が果して人を動かすやうな深い愛であるや否やを願みねばならぬ、自分の同情が人より報酬を受けるやふな厚い同情であるや否やを考へねばならぬ、かくの如く退一步して考へて見ると、私共は自分の愛と云ふもの、淺く且つ偽りの多いことを感ぜずには居られぬやうである、私共が何氣なく、親兄弟妻子朋友其者の利益の爲に同情を表して居ると思ふて居る時でも、翻りてつく／＼考へて見る時には、先には同情を表したる云爲行動もつまり自分の利益の爲にしたる場合が少なくな、私共は折々利己心の發動を誤まりて利他心として、人の之を受けぬを怒る事があるのであるからして、大に氣をつけねばならぬ。(八)

一其同情又は愛が眞實に私共の精神より起きたものとしても親兄弟妻子朋友が之に感ぜぬことのあるのは、つまり自分の同情又は愛の力が微弱なからである。而して又私共の云爲行動はつまり盲人滅法のやふなものであるから、私共の同情を表したる云爲行動に應ずるのが、親兄弟妻子朋友の利益であるか、或は又之に感ぜず應ぜぬのが彼等の利益であるか、終極の點まで行かねばわからぬのである。(九)

一今茲に親が病氣であるとせば、親は温泉に行かうとする、自分は温泉よりは病院に入るがよいと考へて親に勸むると、親は之をきかぬ。かふなると大底の人は自分が親切に思ふて云ふて居るのに、親は之を受け付けぬと云ふて怨むのである。其他こんな場合が

少なくともない。此時もそふである。實際の利益の點から云ふたら温泉行がよいやら、病院行がよいやらわからぬのである。此方では親の病氣をよくしたいのが精一ばいなのであるからしてたとひ自分の意見が通らぬ共病氣が全癒すればよいのであつて見れば、親が自分の同情の勸告を受けてくれぬと云ふて怨むにも及ばぬことではあるまいか。(一〇)

一故に私共は世の中の事柄については總て自分の強情を張らず思ふたこと考へた事は勸めて見るもよいが、夫でなければいかぬとまでに我慢を張らず、そこに之もやはり軽く渡つて行くのがよいと思ふ。(一一)

(明治三十七年八月)

一四。世の中の事は一條繩にては引けぬもの也

一。あの人は一條繩では引けぬ人であるとは、よく云ふ事であるが、特別にあの人はと云はなく、共、どんな人でも、總て一條繩では引けぬのである。總ての人が一條繩で引けないのみならず、世の中の一切の事柄が皆悉く一條繩では引けぬものである。

一。私の経験より見ると、私共青年が事を爲して失望したり人と交りて失敗をしたりする事の多いのは、大底は、此の一條繩で引けない世の中の事や人を、至極單純に考へ過ぎるからではあるまいか。青年時代で世の中の事に多く當らない間は、何事をも單純に考

へ、自分の狭い經驗を基礎として希望とやら理想とやら云ふものを建て、世の中は何でもこうでなければならぬと云ふやうに主張して、夫が行はれぬと失望したり落膽したりする事が間々あるやうである。(三)

一。宇宙は時間を豎とし、空間を横として織りあげた錦のやうで、宇宙間の事物は其反物の模様、のやうである。其反物の一部を引けば全部が動く、一條の糸を取らんとせば其影響は反物全體に及ぶのである。世の中の事物は實に複雑なもので、一條や二條の糸を以て之を律しやうとするのは、まづがひである。私共の小論理を以て世の中を律しやうとするのは、愚なことである。青年が事に處する時には多く此の弊に陥ることがあるから、大に慎まねばならぬ。(三)

一、茲に一粒の米があるとしたまへ、此の一粒の米は簡單であるやうであるが、此の米の過去を考へ、未來を考へ、現在を考ふる時は非常な複雑なものである。先づこの一粒の米の將來を思へば何百年と云ふ末になれば此一粒より何百石と云ふ米が取れるやうになる。又この米の過去を見れば去年の秋に取れた米を蒔いて育て、肥をやり、稻を刈り、種々の苦心の末に出來たのである。其の去年の秋の米は又かやうにして一昨年と關係し、又一昨々年の米と關係し、段々追求し行けば久遠切の昔の米に關係すると云ふてもよい。又米の現在から考へても、この米のある容積には空氣がある事ができぬ。この米の重さが地球を厭して居る。かやうに考ふる時には一粒の米を動かすには中々大底な事ではないのである。(四)

一、之は單に一例を挙げたのみではあるが、今度の日露戦争でもそうです。簡單に考ふれば滿韓問題が戦争の原因であるやうであるが、詳しく驗すれば、是のみが原因ではない。遼東半島の還付も一原因であらう、日清戦争も一原因であらう、樺太問題も一原因であらう、大津事件も一原因であらう。而して此の大津事件の原因、樺太問題の原因、日清戦争の原因、遼東還付の原因などを考へ、其の原因の其又原因を考察し行く時には、今日の日露戦争の原因は久遠劫の昔より數千萬の事物に在り、又この戦争が盡未來際の數千萬の事件の原因となつて居るに相違ない。故に滿韓問題の一原因を以て、日露戦争を論じやうとしたならば、恐の至りである。世の中の事物はそんな簡單の原因結果で動くものではない。(五)

一近時日本兵が露國兵に勝つ原因は何であるかと云ふに就て外人の論ずる所を見ると實に面白い。或者は日本人はフアナチツクであるから勝つと云ひ、或者は日本人は肉食するから勝つと云ひ、或者は日本人は武士道を守るから勝つと云ひ、或者は英國と同盟したから勝つと云ひ、或者は何、或者は何と種々に勝手な事を云ふて居る。かう云ふ具合に論じて行つたならば、日本人は角袖の着物を着るから勝つ共云はれ、日本人は疊の上に坐つて居るから勝つ共云はれ、日本人は脊が低いから勝つとも云はれ、日本人は眼が黒いから勝つとも云はれ、其他種々に云ふ事が出来るであらう。こんな具合に云ふ事が誤かと云ふに、それでもない。今日日本人が勝つと云ふについての原因は幾百萬あるかも知れぬ。之を、あれかこ

れかと小論理に當てはめて見て喜んで居るのはよいが、是こそ眞なれ他は誤まれりと云ふ事は、實に愚の至りではないか。世の中の事は、そうは一條繩で行くものではない。(六)

一よく考へて見れば、見る程世の中の事物の原因結果の大道理は、私共の小論理の一條繩では引けるものではない。私の友人の醫をやつて居る人の話をきけば、人の病氣は實に不思議のもので、自分の方で全癒間違いないと考へたる病人が死ぬことがあり、とてもむづかしいと思ふた病が全癒することがあると云ふ事である。之も世の中の事物が一條繩で引けぬと云ふ證據である。(七)

一此様な事は私共が事に當りて屢々實驗する處で、善いと思ふてしたことが悪い結果になつたり、悪いかと思ふた事が善かつた

する事などは屢々あるのである。人間萬事寒翁の馬と云ふ事は争ふ可らざる真理であるらしい。(八)

一夫であるからして私共は世の中の事物に對して、あいてなければならぬ。こうでなければならぬと力癩を入れるに及ばない力んで見た處が其通りになる事もありならぬ事もあるのである。實際云つたら世の中の事物は清澤先生が申されたやうに何が善だやう何が惡だやうさつぱりわからぬのである。こう云へば懷疑論に陥つたやうであるが私の考は懷疑論と云ふより寧ろ不可思議論とか神秘論とか云ふべきであらうか否な之を名くるに自力無効論を以てしたらやゝ適するであらう。(八)

一私は經驗上から世の中の事物は總て一條繩で引けぬ所の複

雜なものであると云ふ事を悟つて自分の我知我見の益たいぬことが知られ、唯他力の妙用に歸托するの外ないやうになつた。かくて私は蓮如聖人が世間通途の儀に順して當流安心を内心に深くたくはへよの教化を深く味ひ得るやうになつた。(九)

一此の地位に立つて世の中の學者の言論を見ると氣の毒のやうな感じがある。彼等は複雑なる萬象を、小我見を以て計度し、簡單なる原因結果で動いて居るやうに論じて居るのは、未だ世故に慣れぬ青年が何事も簡單に考へて八つ當りをするに能く似て居るてはなからうか。是等の人々は自分の小さな思想で理想だとか真理だとか云ふ附圖を造つて自ら其内にとち籠つて喜んで居るやうに考へらるゝ。『佛說無量壽經』に疑城胎宮を説きて、自力の行者は

化土に生れ蓮華に含まれて居らねばならぬとあるのは、即ちかやうな思想を持つた人を指したのであるやうに思はる。(二〇)

一之に反して私共他力自然の大道を計らはず、疑はず、其儘に信じ頼む者は大宇宙を自己の天地として行く事が出来るのである。個中の天地は哲學者や科學者や倫理學者の知らざる妙樂の境界である。私は今日不可思議の因縁に依りてこの天地に到着する事を得たることを喜ばずして居られぬ。此の喜びの念は不可思議の因縁を慈悲の計らひと感得し、茲に温平たる報身の御相に接し、渴仰の頭をうなだれるに至つたのである。(二一)

(明治三十八年九月)

一五。死及死後の觀念が宗教及道

徳に及ぼす影響

一私共は皆な死なねばならぬ。王侯も死なねばならぬ。非人も死なねばならぬ。老人も死なねばならぬ。青年も死なねばならぬ。病人も死なねばならぬ。壯健な者も死なねばならぬ。生あるものは必ず死なねばならぬといふことは、今更私が云ふには及ばない事である。(一)

一そんなら、その死ぬ時は、何時であるかといふに、死ぬことは、さつと定まつて居るが、何時死ぬるかといふことは、ちつとも定まつては居ない。十年後に死ぬかも知れぬ、二十年後に死ぬかも知れぬ

それ共來年死ぬかも知れぬ、來月死ぬかも知れぬ、明日死ぬかも知れぬ、今夜死ぬかも知れぬ、かく書きながらこの場で私が死ぬかも知れない、私はこの文章が出来あがらないのだから死ぬことを延ばして貰ひたいと思ふところが、それは到底だめなのである。故に佛教ではこの人生に於ける私共の生命を生死無常と教えてある。私共は常にこの生死無常の教訓を忘れずして、只今にも死なねばならぬといふ事を覺悟して居らねばならぬ、只今にも死なねばならぬといふ觀念が、宗教上の信仰に到るの導火線となることは、釋尊始め古來の高僧知識の修道求信の跡をたづねればわかることである。(三)

一、只今にも死なねばならぬといふやうに思ふと、直ぐ私共の心

に浮んで來る問題は死後の問題である。この死後の問題即ち死んだらどうなるだらうといふ問題を分解して見ると凡そ二通りとなる。一には僕が死んだら妻子眷族がどうするだらうといふ疑問。二には死んだら僕はどうなるであらうといふ疑問。前者は他人に就ての疑問、後者は自分に就ての疑問である。(三)

一、而してこの自分の死後に就ての疑問を又二つに分ける事ができる。一には死んで後に自分の名譽や事業はどうなるであらうかといふ疑問、二には死んで後に自分の靈魂はどうなるであらうかといふ疑問。前者は普通の人の爲す心配で、後者は幾分か宗教的傾向を持つて居る人の爲す心配である。(四)

一、そこで、何時死ぬかも知れぬといふ問題と死後の疑問とを結

びつけて考へて見ると、まあさつと、かやうなぐわいになる。第一、僕は今夜にも死なねばならぬが、今僕が死んだら、僕の妻子はどうするであらうか。第二、僕が今夜にも死んだら、僕の名聲はどうであらう。僕の事業はどうなるであらうか。第三、僕は今夜にも死なねばならぬが、今死んだなら、無に歸するのであらうか。或は又靈魂といふものがあるのであらうか。あるとすれば、その靈魂はどこへ行くのであらうか。何も考へないで居れば、兎も角、少しでも自己省察の工夫をする者ならば、いかなる人でも、死及死後に對してかくの如き心配のない者はない筈である。能く／＼考へて、此心配の關門を通り抜けた人は、それでよいが、未だ通り抜けられぬ人は、深く考へて見なければならぬ。此事は一人として免るゝ事のできない難關

であるから、平素から、之に對する準備をして置かねばならぬ。(五)

一、僕が今死んだら、老いたる兩親はどうするであらう。若い妻はどうするであらう。幼ない小供はどうなるであらう。誰でも、只今死ぬと思へば、この心配のないものはあるまい。私自身もかやうなことに心を勞する事もある。又多くの人に接してきいて見ると、かやうな心配を持つて居る人が多いやうである。別して自分が不治の病氣にでも罹つて居る人に、この心配が多いやうである。(六)

一、故に私はこの心配がいかなる所へ私の心を導き、いかに私の行爲を支配するかと云ふことに就て話して見たいと思ふ。(七)

一、僕が今死んだら、父母妻子がどうするであらうといふ心配をいくら續けて居つても、この疑問の解決は到底つかないのである。

自分○が○世○に○活○き○て○居○つ○て○さ○へ○父○母○妻○子○の○事○に○就○て○は○な○か○く○我○
が○思○ひ○通○り○に○運○ぶ○も○の○で○は○な○い○然○る○に○今○自○分○が○死○ん○で○後○の○事○を○
思○ふ○の○だ○か○ら○な○か○く○解○決○が○つ○こ○う○等○が○な○い○私○共○が○こ○の○解○決○を○
得○る○に○は○是○非○共○こ○の○父○母○妻○子○以○上○の○光○明○に○接○す○る○で○な○く○て○は○な○
ら○ぬ○の○で○あ○る○故○に○私○は○こ○の○問○題○を○考○へ○考○へ○て○行○く○と○終○に○宗○教○の○
天○地○に○は○い○り○て○安○慰○を○得○る○よ○り○外○は○な○い○の○で○あ○る○(八)

一人には自分の力に属するものと、屬しないものとの二つがあ
る。妻子眷族は我が力に属するものではない、金銀財寶は我が力に
属するものではない。我が力に属するものは苦樂を支配する自分
の意力のみである。人はこの自分の力に屬せざるものを、儘にしや
うと思ふからして心配もし、苦勞もしなければならぬ。これは天理

に背いたことであるから、かやうに苦まねばならぬのである。故に
我々は死んでから後の妻子の事などは思ふてもかなはぬことと
あるから、それ等を心配せぬやうに自分の意志力を用うるのが大
事である。かくて死後の妻子の心配はなくなるであらう。之はエビ
クテタスの教うる所である。(九)

一 私^二が昔セサリ^一に行つた事がある。其間にも彼等妻子は餓死も
せなんだ。今私が死んだ後でも、どうかこうかなるであらう、と平氣
で居つたのは死期に臨んでのソクラテスであつた。(一〇)

一 清澤先生は、常にこの二賢の語を以て私共を教えられた。先生
自身も、不治の病氣にかゝつて居つて命は旦夕に迫まつて居るの
に、老ひたる父上はある。奥様はある。子達が四人もあつて皆幼少で

あるといふ有様だから、死後の妻子の問題に就ては少からざる心配をなされたものと見える。而してこの先生の心配は、終に宗教的安住に落付いたやうである。(二二)

一親のある子でもろくなものになれぬがある。親のない子でも立派になつて行くのがある。學資があつて墮落するのもあり、苦學して成功するのもある。故に私共は、自分が死んだら自分の妻子はどうなるであらうと云ふ心配は殆んどいらないのである。父母に對する心配も之と同じである。大體私共が自惚が深いものだからして、自分が居らぬやうになつたら、父母妻子はどうするであらうと思ふのであるが、よく考へて見れば、私等は自分がどうする事もできないのである。いくら自分が生きて居たとて、父母妻子が

よくなるにきまつた事はな。(二三)

一故に私共は自分の現在と將來を御慈悲の親たる佛の御手に托して安住すると同時に、自分の愛する者の現在と將來との運命をもこの御親の御計らひにまかして安住する外はないのである。(二三)

一僕が死んだら、老いたる父母はどうなさるであらうといふ心配のある者は、佛よきに計らひ給ふべしと父母を佛の御手に托するのである。僕が死んだら妻子がどうするであらうといふ心配のある者は、佛よきに計らひ給ふべしと、妻子を佛の御手に托するのである。かくて私共が負ふて居つた父母妻子に對する總ての義務を佛におまかせをした所で、私共は肩の重荷が卸されて樂に暮さ

るゝのである。死後、父母妻子がどうなるであらうとの心配は、かやうにして私共を宗教の信念の門に導くのである。(二四)

一、かやうに自分の死後、父母妻子の運命を佛に托した以上は、最早心配なしである。根本に於てかやうになつて居つても又折々凡情にかられて、いろ／＼と思ふ事のあるのも私共の實狀である。故に夫に對して、私共は日常の行爲の上に於て、只今にも死ねと云ふ事を忘れずして、死後に父母妻子の厄介になるやうな事はなるべくしておかぬやう、彼等の爲めになるやうにしておくやうに心懸けねばならぬ。子孫の爲めに金を遺すもよいが、一番結構なのはまじめな、正直な生活を子孫の爲めに遺すがよい。故に私共は死後妻子がどうであらうと考へた時には、平素の一舉手一投足にも注意

をして道をはずれた行爲をしないやうにしたいものである。(二五)

一、財産のある人は財産がどうなるであらうと云ふ心配もあらう。借財のある者は又借財に就て心配するてもあらう。世の中には随分自分の財産の爲めに死後に苦んで居る者がある。私の友人の某財産家は云ふて居る、どうも今死ねと思ふと私共は財産の爲めに心配が多い。故に私は貧乏人の方が死に際がよい様に思ふと又、某知人が云ふて居る。私はいろ／＼の事業をやつて澤山の借金を造つた。生命があれば義務を果すつもりで居つたが、只今死ねば之を返すわけには行かぬ。債主に對しては誠にすまぬわけである。この兩方の知人の申す事は殆んど總ての人の代表と云ふてもよろしいのである。私も學途に居る頃はかやうにして學資金を入れ

て貰ひながら、この儘に死んだなら、實にすまないわけてあると思ふた事もあつた。今日でもふいと左様な考をする事があるのである。(二六)

一、かやうな心配も例の自惚から起つて來るのである。自分が居りさへすれば財産が儘だと思ふて居るのが大體まちがつて居る。いくら主人が確乎して居つても財産がなくなる事がある。大體財産などいふものは全く自分の力一つで集まるものではなくて、一に因縁による事である。それを何ぞや自分の手一つでどうでもなるやうに考へるからして、死んだ後の事までも苦勞をするのである。借金の方もそうである。自分が生きて居つた所が返済ができて、かてきぬかば疑問に屬するのである。それだから自分が死んで

は債主にすまぬといふもいらぬ苦勞である。今生に返済ができなければ來世に返済してもよいではないか。こゝになると永遠の生命といふ事を信じて居るものは、苦勞がいらぬのである。然しこゝは云ふものゝ、財産のある人は何時死んでも後のごたくせぬ様に平素から財産の處置法をつけておくがよい。借金のある人も平素から其方法をつけておくがよろしい。する事はかやうに人事を盡してゐいて、根本の精神は佛の御計らひにまかし安住して居るのが、私共の進むべき唯一の道かと思ふ。(二七)

一、僕は今夜にも死んだら、僕の名聲はどうであらう。僕の事業はどうであらう。昔から棺を蓋ふて名定まるといふ事もあるから、死ぬとすると名聲はどうかといふ事は誰でも考へるであらう。又自

分のやり掛て居る事業を半途にやめる事をも遺憾に思ふであらう。自分が死んだなら世間では自分をどういふぐわひにもてはやすだらうといふ事を見たいと思ふて、死んだといふ評判を出して世間の批評をきいたといふ人は西洋にも東洋にもあつた。之れが私共の奥深くある人情の弱點を暴露したものの、様に思はるゝ。

一、自分の死後といふ問題に關しては、いろ／＼議論のある事なれど、靈魂があるといふ人も、無いといふ人も、共に許さねばならぬのは、名聲の死後に残る事、事業の残ること、思想の残る事などである。正成や尊氏の靈魂はあるかないかはさて置いて、彼等の名は今にも残つて居る。釋尊や孔子やソクラテスの靈魂の有無を論じないとしても、彼等の思想は今日まで残つて居る。ラツフェルや兆殿司

やの靈魂はともかく、其の製作は今日に残つて居る。埃及人は死んでもピラミットは今日に残つて居る。始皇が死んでも長城が残つて居る。かやうな事は一般の人が認むる事であるからして、人が名譽を望み、功業を目がくるは偶然ではない。只今死んだなら自分の名聲はどうなるであらうといふ心配、事業はどうなるであらうといふ心配、之等は人間が永生の理想を追ふて居る者である事を表徴して居るのでなからうか。夫であるからして私共はこの疑問心配を基礎としても、宗教の天地に進み入ることができる。否進み入るてなければ、死の問題の前に平然たるわけにはいかぬのである。(一九)

一、戦争が始まつてから名譽の戦死といふ言葉がひやみに流行

するやうになつた。之は死者の死に同情する人の心を慰むる爲めに、其の人の名譽の上に於ける永遠の生命といふことをほのめかしたものである。私は戦死者を弔慰するに名譽の戦死を遂げて名は萬世に輝くべしといふ言葉を使用する上に人間といふものは永遠の生命にあてがれて居るもので、永遠の生命を獲得して始めて安住する者であるといふ宗教的傾向の閃光を見る事を得るのである。(二〇)

一、只今死んだら名聲はどうであらうか、いふまでもない、名聲は自分の爲した功業に應ずる丈けてある。そんならどんな功業をしたか、哲學者ならば思ふであらう、未だプラトンの『ダイヤログ』のやうな著述がないと、科學者ならば思ふであらう、未だダルウキンの

『オリジシ、ラプ、スピーセス』のやうな著述がてきぬと、詩人ならば思ふであらう、未だダンテの『ディビナ、コメデヤ』のやうな詩が得られないと、藝術家ならば思ふであらう、未だラツフェルの『マドンナ』のやうな作がないと、政治家ならば思ふであらう、未だビスマルクのやうな功業を得ないと、軍人ならば思ふであらう、未だアレキサンダのやうになれないと、其他何れの種類に屬する人でも、自分はこれに立派な事業を爲し遂げたと思ふて居る人はあるまい、小成に安ずる人ならば兎に角、其道に熱心なる人であるならば、いつ死んでもこれて一生の仕事を爲し遂げ終はれりと思ふて居る人は少ないであらう。故に私共はこの功業とか名譽とかいふ事を考へて、死を思ひ、死後を思ふ時にはどうしても死の前に戦慄せざるを得

ない死に就て遺憾に思はずには居られない。(三二)

一この遺憾を拂ひのけて、平然として死の門に向ふを得るが爲めには、私共はどうしても宗教の門を通らねばならぬ。私がかやうに信ずる私共がこの世に生れ出て来たのは、大なる御力に動かされ、大なる御力の使命を帯びて生れ来たものである。而して私共が死ぬのは、この私共をこの世に送つて下さつた御力が私共に歸郷を命じ給ふのである。故に私共は生命のある間は與へられたる使命の遂行に努力するが、死が命ぜられたならば、遺憾なく其の仕事に離れて行かれるのである。自分の仕事ならば、果されなかつたと思へば、残念でもあらうが、佛の仕事を爲て居ると思へば、仕上をさせてよい人に仕上を命じ給ふのであらう。下仕事丈をさせてよい

者には、下仕事をさせて下さるであらうと信じて居れば、いつ死んでも遺憾なしである。(三三)

一功業に就てかやうな覺悟が出ると同時に名譽といふ事に就ての心配も離るゝ事ができる。私共の永遠の名は佛の名である。この佛の名は私共に與へられたる名である。この世の事業はこの名の下に働く仕事であると思へば、只今死んだらつまらないなど、いふ愚痴は起らぬかやうな宗教的の安住に至るにあらずんば到底功業又は名譽に對する死後の心配は取れぬ様に思ふ。私がかやうに信ずる迄はこの心配はとれなかつたのである。(三三)

一かく安住ができた後に、平素の心がけの上では、名譽と生死無常といふ事を結び付けて考へて見て、何事を爲すにも、それを爲しつ

い死ぬといふことを思ふてつまらぬはづかしい行爲をしないやうにせねばならぬ。水師は水で果つるといふ諺もあるが、盜賊は盗みつゝ死し、放蕩家は遊廓で死ぬと思はねばならぬ。學校の途で死んだといへばよいが、吉原の道で死んだとあつてはさゝにくいてはないか。故に私共は何處に行くにも、そこで死んでも一點耻づる所のない所へ行かねばならぬ。何事をして、も、そを爲しつゝ死んだといふても耻しからぬ事をする様にせねばならぬ。(三四)

一、私の友人の妻君が出産の前に箆箆を整理し、自分と夫との衣類萬般に垢つきしものなきまでにして出産を待つたといふて居る。之は死を覺悟したからである。又戰地に於ける軍人が戦争の休みの間にはいろ／＼の品を分捕して身體につけて居るが、戰場に

出る時に、あゝこんなものを持つて死んで、は耻かしいと思ふと、今まで大事にして持つて居た分捕物を悉皆捨て、しまうと云ふ事である。之も生死無常の考と名譽の問題と連關して考へたのが道徳の上に及ぼす影響の一例である。私は總ての人が出産前の婦人、戦地の軍人の心掛は常になければならぬと思ふ。生命の殆いことは出産の折ばかりではない、戰場のみではない、人間の老少不定のはかなきことは、出づる息の入るをもまたぬ習ひであるからして、私共は平素の一舉一動の上に注意に注意を加へて耻しからぬ行動をするやうにせねばならぬ。(三五)

一、かやうに只今にも死ぬといふ事を思ふて行ひを慎むといふことは、佛の御冥見に耻ぢて行ひを清淨にするといふことゝ相ま

ちて道徳の實踐の上に偉大な働きをなすものである。(三六)

一私共の死後には靈魂なるものありやなしや、若しありとすればいかなる所に生るべきか、死及び死後の問題を考ふる者は必ずこの問題に遭遇せねばならぬ。死後の靈魂有無論は古來より議論のある事、哲學上及び宗教學上の大問題となつて居るのである。現今でも、この問題に就て考へて居る人は少くない。(三七)

一今私は茲に靈魂有無の議論をするのが目的ではない。私はこの死後靈魂有無の問題が、宗教及び道徳にいかなる導きをするかといふことを、獨斷的に跡つけて見たいと思ふ。(三八)

一議論の上から行くと靈魂がないといふ説もたゞぬでもない。又一方に靈魂があると云ふ説もたゞぬでもない。又近來に至りて

は靈魂があると云ふ説に改良を加へて勢力保存の道理を以て説明するもあれば、靈魂有無論を折衷して個々の靈魂はないが、大なる普遍的の靈魂は存在して居つて、人間が死するとこの普遍的靈魂に歸するのであると説く人もある。總ての宗教で説く所を見ると、個人的の靈魂が存在して、この生で爲した罪業に依つて、來世の世界で苦惱を受け、善業によつて來世で福を受くると云ふやうに説く。之は佛教でも、耶蘇教でもそうするやうである。又佛教では、靈魂がないと云ふのは無の見の外道と云ふと同時に、靈魂があると云ふのも有の見の外道と稱して兩方共に嫌ふて居る。今私は之等の諸説を批評もせぬ、又議論として私の説も述べぬ。私は死後の靈魂の有無問題は、科學や哲學の解すべき問題でないと思ふ。尠く共

私一個の智脳にては到底極むる事のできない難問題であると思ふ。故に私はこの問題を説くに信仰の力を借りたいのである。否、この問題を解釋するに信仰問題を借ると云ふよりは寧ろ、この問題の終極は信仰問題に到着すると云ふ方がよいと思ふ。(三九)

一現代の人の中では死後の靈魂の問題を解釋して後に信仰を定めやうとして居る人も往々見受けるやうだが、之等の人は恐らくは其道を誤つて居りはせぬか。私の經驗によると、之に反對で、信仰の問題に解決ができて、靈魂問題に自ら解釋ができたやうである。私はこの死後靈魂有無の疑問は私共を信仰の内に追ひ込む力であると思ふ。(三〇)

一死後靈魂が無いものとする、人は皆惡を恐れぬやうになつ

て、人倫道德が行はれぬといふ風に心配した人は古今東西に澤山ある事である。又死後靈魂が無いとすれば佛や神の救済は無意義である。と論じた人も古今東西に澤山あり又この事を心配した人も澤山ある。科學者はこの説がなりたてば宗教がこはれるやうに思ひ、倫理學者や宗教家の方でもさやうに考へた人は尠くなかつた。否、現在でも多くの人はかやうに思ふて居るやうである。然し私はあながちにこう思ふにも及ぶまいと思ふ。死後の靈魂がないとしたとて、道德が行はれぬにしまつては居らぬ、靈魂が無いとして反つて善事は是非共今世に成遂げねばならぬといふやうになつて道德が行はるゝかも知れぬ。死後の靈魂の有無を説く科學者が必らず不道德者であるときまつても居らず、來世の有を信じて居

る者が必ず徳者であるともきまつても居らぬ。宗教も亦そうであつて、來世の靈魂があるとするものないとするも、私共現在の心狀に於て來世を苦む心がありとすれば、是れ亦この心の救ひを佛に求めねばならぬ。個人としての靈魂があるかないかと云ふ事は、宗教の成立には多くの影響を與ふるものではない。尠く共、私自身の信仰はこの議論によつて動かされはしない。(三二)

一 死後個々の靈魂があると云ふ道理がたゝぬと科學者はいふ。或はそうかも知れぬ。科學的眼光から見れば道理がたたぬかも知れぬ。然し眼光を一轉すれば、この道理がたゝぬでもない。靈魂の有るを信ずる者があながち、勢力保存説に逃げ道を求めなくてもよいやうに思はるゝ。(三三)

一 死後靈魂が存在するとすればいかなる形狀を以て存在するかと云ふ事も、次に來る難問題である。昔婆羅門教に人が死せば人に生れ來ると云ふ説を稱へた人もあつた。佛教では、六道輪廻と云ふことを説いて、人が死んだら、個人個人の業報によりて地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上に生ると云ふ事を教えて居る。又佛を信ずる者は佛力に依つて靈魂は西方の淨土に往生すると教えて居る。耶蘇教でも、やはり神を信ぜぬ者はヘルに墮し、神を信ずる者は天國に生ると教ゆるやうである。靈魂問題に科學的説明を加へたのが靈魂不滅論即ち勢力不滅説とも云ふべきのがあつて近代の多くの學者は、この議論を主張する者も多いやうである。この説に従ふと、私共の靈魂は死後に至つて、唯一の靈魂に合すると云ふので、

其の趣きがいかに私共が信仰上より發足して到着した解釋即ち佛に攝取せられ佛と一體になると云ふ信念とよく似て居るのである。(三三)

一私に死後の靈魂の有無を決着する前に現在の精神の安慰を求むる爲めに私を救ふて下さる慈悲の佛を信じて過去の罪は赦され現在に力を得未來に希望の光明を得たのである私は五尺の身體を持つ汚れた弱いものなれども大千界にみち給へる佛の御力はこの五尺の肉體に満ち給ひて清淨なる光明を放ちて力を與へ給ふ事を感得して喜んで居るのであるかうなつて見ると最早私には死後に於て靈魂があるかあるまいかあるとしたならばどんな形ちであらうかなど云ふ疑問も心配もない慈父

若し私に存在を許し給はぬならば滅するのであらう慈父若し私に存在を命じ給ふならば存在するであらう其の存在が個人的であらうと普遍的であらうとそんなことは私の方から彼此云ふべきではない私共は慈悲の如來の御心の儘に托して安住して居ればよいのである私は後生の一大事は自分の手に合はぬ事故に他力の御計らひにまかすより外仕方がないのであるかくて如來が私に極樂に於ての個人的存在を許し給ふとあれば喜んでそを信じて満足して希望の生活をするのであるがやうにして私は千古不解の疑問たる死後靈魂有無の問題は易々と通過し解釋し得たのであるつまり古來の靈魂の有無論は私の信仰の妨げとはならずして反りて私に自力の智慧を捨て、他方の御心に托する信仰